

一般国道8号敦賀バイパス
関係遺跡調査報告書第1集

坂 ノ 下 遺 跡 群

坂 ノ 下 遺 跡
明神山古墳群丑寅山支群
丑 寅 山 遺 跡
坂 ノ 下 中 世 墓 群

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

一般国道8号敦賀バイパス
関係遺跡調査報告書第1集

坂 ノ 下 遺 跡 群

坂 ノ 下 遺 跡

明神山古墳群丑寅山支群

丑 寅 山 遺 跡

坂 ノ 下 中 世 墓 群

序

敦賀は、古代北陸道の枢要の地であり、各時代の主要な遺跡が数多く所在している。今回発掘調査を実施した坂ノ下遺跡群の周辺でも、平野部には弥生時代の吉河遺跡や弥生～古墳時代の中遺跡などの集落跡が、また、山麓部には国指定史跡の中郷古墳群を初めとして、多数の古墳が存在している。

坂ノ下遺跡群は、弥生時代前期以降の集落跡である坂ノ下遺跡、古墳時代前～後期の古墳群で中郷古墳群の一部をなす明神山古墳群、丑寅山遺跡、坂ノ下中世墓群などからなる遺跡である。ところが、一般国道8号と一般国道27号との、市街地を迂回する両バイパスの建設予定地内に位置しており、当初建設によって多数の重要な遺跡が、調査後には消滅する運命になっていた。しかし、建設省福井工事事務所のご理解により工法が変更され、明神山古墳群の中核をなす主要古墳については保存し、国史跡として指定することができた。発掘調査はこの坂ノ下遺跡群のうち保存が不可能な箇所について、昭和60・61（1985・1986）両年に実施したものである。

このたびの調査では、前・後期の古墳や土壙墓・竪穴式小石室、ならびに経塚や中世墓など、多数の各種遺構を検出した。対象とした古墳は、明神山古墳群の丑寅山支群に相当するものであって、明神山古墳群の一端を明確にしえた。また、中世墓群は、北陸でも稀な例に属す、この種の遺跡の本格的な調査例になった。わけでも、後者は、中世の墳墓群を解明する上で重要な資料であり、往時の社会や埋葬の様子をより一層明確にできることと思う。

本報告は決して十分なものとはいえないが、少しでも早く調査の全容を公表するため、このたび刊行する次第である。この報告が、これらの遺跡に対する理解と保護の一助となれば、まことに幸いである。

最後になったが、発掘調査事業の進展ならびに遺跡の保存にご理解を賜った建設省近畿地方建設局、同福井工事事務所を初め、敦賀市教育委員会社会教育課、気比史学会、地元の方々などのご協力を得た。また、文化庁ならびに奈良国立文化財研究所、名古屋大学、富山大学などの諸機関や、故・小林行雄京大名誉教授を初め諸先生方には、ご多忙にもかかわらず懇切なるご指導を頂いた。ご援助頂いた諸機関・先生方に厚く謝意を表し、今後より一層のご支援をお願いしたい。

平成 20 年 11 月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、建設省近畿地方建設局福井工事事務所からの受託事業として、福井県教育庁文化課が昭和56（1981）年、同60・61（1985・1986）年に実施した、一般国道8号敦賀・同27号金山の両バイパス建設に伴う、福井県敦賀市坂ノ下にある坂ノ下遺跡群の発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する坂ノ下遺跡群とは、坂ノ下遺跡、明神山古墳群丑寅山支群、丑寅山遺跡、坂ノ下中世墓群などを総称したものである。そのうち坂ノ下遺跡は、敦賀市坂ノ下十九字羽折（羽織）から二十五字宮ノ上にかけての平地に所在し、昭和56年に字羽折において遺跡の有無確認の試掘調査を実施した。また、明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡は、同四十二字丑寅山（一部二十二字堂坂にもおよぶ）の丘陵上に所在し、昭和60・61の両年に事業名「明神山古墳群堂坂支群ならびに屋敷跡」として、緊急発掘調査を実施したものである。なお、後者の遺跡については、これまで古墳群名などを「明神山古墳群堂坂支群」、中世墓群などを「堂坂遺跡」として概要報告したことがある。しかしその後、今回の調査箇所的大部分は字堂坂よりもむしろ字丑寅山に相当することが判明した。よって、本報告ではより正確を期して、遺跡名を改称したが、中世墓については歴史的な経緯を考えて、「坂ノ下中世墓群」と呼称する。以後、上記の名称をもって正式な遺跡名とすることとしたい。

3. 本書の執筆は、次のように分担した。

第1章、第2章第1節、第3章第2節、第4章、第5章第1節1	・ ・ ・ ・ ・ 中司照世
第2章第3節、第3章第1節、第5章第1節3、第2節3	・ ・ ・ ・ ・ 工藤俊樹
第2章第2節、第5章第1節2、第2節2	・ ・ ・ ・ ・ 赤澤徳明
第5章第1節2・4、第2節4	・ ・ ・ ・ ・ 南洋一郎
第5章第2節1・4	・ ・ ・ ・ ・ 水村伸行
第5章第3節1	・ ・ ・ ・ ・ 学習院大学 木越邦彦
第5章第3節2	・ ・ ・ ・ ・ 富山医科薬科大学 松田 健・森沢佐茂

なお、各文末ごとに執筆者名を記し、責任の所在を明確にした。

4. 上記3遺跡の発掘調査の実施にあたっては、文化庁文化財保護部記念物課の指導や、敦賀市教育委員会・建設省近畿建設局福井工事事務所工務課・富山大学人文学部考古学研究室・敦賀市立歴史民俗資料館・気比史学会・私立敦賀博物館・敦賀美術考古学会などの援助を得た。なお、福井県立朝倉氏遺跡資料館には特別な協力を得た。

5. 本書の編集は赤澤があたった。報告書作成までに種々の協力や援助を頂いた関係各位ならびに各機関に深謝したい。

この報告書は、本来ならば平成元年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至りました。

なお、報告書原稿は、すでに執筆されている部分もあることから、混乱を避けるため当時の内容で執筆を進めました。そのため、現在の見解とは一致しない部分があります。

本文目次

	頁
第1章 序 記	1
第2章 調査の経過	
第1節 坂ノ下遺跡	4
第2節 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡	4
第3章 周辺の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	13
第4章 坂ノ下遺跡の調査	
第1節 遺 跡	20
第2節 遺 物	20
第3節 ま と め	23
第5章 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡の調査	
第1節 遺 跡	27
1 古墳時代	27
2 その他の時代	50
3 小 結	50
第2節 遺 物	53
1 古墳～律令時代	53
2 小 結	54
3 縄文時代	57
第3節 ま と め	58
第6章 坂ノ下中世墓群の遺構	
第1節 坂ノ下中世墓群の概要	63
第2節 経塚	64
第3節 中世墓の概要	66
第4節 中世墓A群	70
第5節 中世墓B群	81
第6節 中世墓C群	90
第6節 中世墓D群	93
第7章 坂ノ下中世墓群の遺物	
第1節 蔵骨器	110
第2節 陶磁器	114
第3節 土師質土器	118
第4節 金属製品	121

第5節 石造物	122
第8章 坂ノ下中世墓群のまとめ	
第1節 石造物の時期について	157
第2節 骨片の出土状況について	161
第3節 中世墓の造営の時期と造営者	162
第9章 附編 自然科学分析	
第1節 分析内容について	165
第2節 放射性炭素年代測定について	165
第3節 坂ノ下中世墓群出土骨について	166

図版目次

本文対照頁

図版第一	坂ノ下遺跡群	(1) 敦賀平野東部 (2) 遺跡群
図版第二	坂ノ下遺跡群	航空写真
図版第三	坂ノ下遺跡	出土遺物
図版第四	明神山古墳群	(1) 調査開始時の全景 (2) 丑寅山支群A地区の発掘状態
図版第五	明神山古墳群	(1) 12～14号墳の発掘状態 (2) 旧16号墳推定地の発掘状態
図版第六	明神山古墳群	(1) 表土除去後の12号墳全景 (2) 墓壙検出後の12・16号墳全景
図版第七	明神山古墳群	(1) 12号墳墓壙 (2) 12号墳墓壙
図版第八	明神山古墳群	(1) 表土除去後の13号墳全景 (2) 墓壙検出後の13号墳全景
図版第九	明神山古墳群	(1) 13号墳墓壙 (2) 13号墳墓壙
図版第一〇	明神山古墳群	(1) 表土除去後の14号墳全景 (2) 墓壙検出後の14号墳全景
図版第一一	明神山古墳群	(1) 14号墳墓壙 (2) 14号墳墓壙
図版第一二	明神山古墳群	(1) 墓壙検出後の15号墳全景 (2) 墓壙検出後の15号墳全景
図版第一三	明神山古墳群	(1) 15号墳墓壙の埋土断面 (2) 15号墳墓壙
図版第一四	明神山古墳群	(1) 16号墳横穴式石室礫床の出土状態 (2) 16号墳横穴式石室の墓壙
図版第一五	明神山古墳群	(1) 16号墳横穴式石室の墓壙 (2) 16号墳横穴式石室の墓壙
図版第一六	明神山古墳群	(1) 17号墳と隣接遺構との関係 (2) 17号墳縦穴式小石室内部
図版第一七	明神山古墳群	(1) 17号墳縦穴式小石室 (2) 17号墳縦穴式小石室
図版第一八	明神山古墳群	(1) 土壙墓供献土器の出土状態 (2) 土壙墓供献土器の出土状態
図版第一九	明神山古墳群	(1) 土壙墓全景 (2) 土壙墓墓壙
図版第二〇	明神山古墳群	(1) 縦穴式小石室 (2) 縦穴式小石室
図版第二一	明神山古墳群	(1) 樹木伐採後の18号墳全景 (2) 丑寅山支群B地区の発掘状態
図版第二二	明神山古墳群	(1) 18号墳の発掘状態 (2) 墓壙検出後の18号墳全景
図版第二三	明神山古墳群	(1) 18号墳墓壙 (2) 18号墳墓壙
図版第二四	明神山古墳群	(1) 丑寅山支群B地区の発掘状態 (2) 18号墳南方遺構
図版第二五	丑寅山遺跡	(1) 1・2号土壙 (2) 2号土壙

- 図版第二六 坂ノ下中世墓群 (1)1号経塚(南から)(2)2号経塚(北から)
- 図版第二七 坂ノ下中世墓群 (1)A・B・C群全景(西方から)(2)D群全景(西から)
- 図版第二八 坂ノ下中世墓群 (1)A・B・C群検出状況(西方から)(2)D群検出状況(西から)
- 図版第二九 坂ノ下中世墓群 (1)A群全景(西から)(2)A群方形区画墓(西から)
- 図版第三〇 坂ノ下中世墓群 (1)A群方形区画墓(南から=2号から9号方向を望む)
(2)A群方形区画墓(北から=9号から2号方向を望む)
- 図版第三一 坂ノ下中世墓群 (1)A群1号墓(西から)(2)A群2・3号墓(西から)
- 図版第三二 坂ノ下中世墓群 (1)A群4号墓(西から)(2)A群5・6・9号墓(西から)
- 図版第三三 坂ノ下中世墓群 (1)A群7・8号墓(西から)(2)A群5号墓納骨坑(西から)
- 図版第三四 坂ノ下中世墓群 (1)A群5号墓納骨坑(西から)(2)A群5号墓納骨坑下部(西から)
- 図版第三五 坂ノ下中世墓群 (1)A群6号墓区画内下層(西から)(2)A群10・11号墓周辺(西から)
- 図版第三六 坂ノ下中世墓群 (1)B群全景(西から)(2)B群14・15号墓(西から)
- 図版第三七 坂ノ下中世墓群 (1)B群16号墓(西から)(2)B群17号墓(西から)
- 図版第三八 坂ノ下中世墓群 (1)B群18号墓(西から)(2)B群19・20号墓(西から)
- 図版第三九 坂ノ下中世墓群 (1)B群21・22号墓(西から)(2)B群22号墓蔵骨器検出状況(東から)
- 図版第四〇 坂ノ下中世墓群 (1)C群全景とD群26号墓(西から)(2)C群全景(西から)
- 図版第四一 坂ノ下中世墓群 (1)原位置を想定したC群全景(西から)(2)C群23・24号墓(西から)
- 図版第四二 坂ノ下中世墓群 (1)C群24号墓(西から)(2)C群25号墓(西から)
- 図版第四三 坂ノ下中世墓群 (1)D群26号墓(南西から)(2)D群26号墓(北西から)
- 図版第四四 坂ノ下中世墓群 (1)D群26号墓切断状況(西から)(2)D群26号墓下層状況(南西から)
- 図版第四五 坂ノ下中世墓群 (1)(2)D群27・28・29・30号墓(上から)
- 図版第四六 坂ノ下中世墓群 (1)D群31・32・33号墓(西から)(2)D群34・35・36・37・38号墓
(手前)、42・43・44・45・46・47号墓(奥)(西から)
- 図版第四七 坂ノ下中世墓群 (1)D群35・36・37・38・39号墓(西から)
(2)D群38・39号墓近景(西から)
- 図版第四八 坂ノ下中世墓群 (1)D群40・41・42・43・44・45号墓(手前)、48・49号墓(奥)
(西から)(2)D群40・41・42・43号墓近景(西から)
- 図版第四九 坂ノ下中世墓群 (1)D群42号墓地輪下の蔵骨器検出状況(西から)(2)D群44・45・
46・47号墓(手前)、48・49・50・51号墓(奥)(西から)
- 図版第五〇 坂ノ下中世墓群 (1)47・51号墓(手前)から44・48号墓(奥)方向を望む(北から)
(2)D群緑色凝灰岩製板碑(S178・179・180・183・184)出土状況
- 図版第五一 坂ノ下中世墓群 (1)D群27~30号墓前面の板碑(S127・128)出土状況(2)D群27~
30号墓前面の板碑近景(S122~127)と26号墓J字状石列
- 図版第五二 坂ノ下中世墓群 (1)D群31~33号墓前面の緑色凝灰岩製板碑(S142)出土状況
(2)D群52号墓(西から)
- 図版第五三 坂ノ下中世墓群 (1)D群28・29・30号墓近景(西から)(2)D群40・41・42号墓近景
(西から)(3)D群45・46・47号墓近景(西から)

		(4)D群49号墓捏鉢出土状況（東から）
図版第五四	坂ノ下中世墓群	(1)D群53号墓（西から）(2)D群57号墓（西から）
図版第五五	坂ノ下中世墓群	(1)D群56号墓（西から）(2)D群56号墓切断状況（西から）
図版第五六	坂ノ下中世墓群	(1)D群56・57号墓（西から）(2)D群54・55号墓と石造標識墓群（北から）
図版第五七	坂ノ下中世墓群	(1)D群54・55号墓と56・57号墓（北から） (2)D群54・55号墓（西から）
図版第五八	坂ノ下中世墓群	(1)D群58号墓（西から）(2)D群58号墓蔵骨器出土状況（西から）
図版第五九	坂ノ下中世墓群	(1)D群26号墓出土蔵骨器 (2)D群35号墓出土蔵骨器 (3)A群4号墓出土蔵骨器 (4)D群58号墓出土蔵骨器
図版第六〇	坂ノ下中世墓群	(1)B群21号墓出土蔵骨器 (2)D群38号墓出土蔵骨器 (3)D群42号墓出土蔵骨器 (4)D群49号墓出土蔵骨器
図版第六一	坂ノ下中世墓群出土陶磁器片①	
図版第六二	坂ノ下中世墓群出土陶磁器片②	
図版第六三	坂ノ下中世墓群出土経筒外容器蓋・陶器・土師器	
図版第六四	坂ノ下中世墓群出土土師器土製品・金属器	
図版第六五	坂ノ下中世墓群出土空風輪①	
図版第六六	坂ノ下中世墓群出土空風輪	
図版第六七	坂ノ下中世墓群出土火輪	
図版第六八	坂ノ下中世墓群出土水輪	
図版第六九	坂ノ下中世墓群出土地輪①	
図版第七〇	坂ノ下中世墓群出土地輪②	
図版第七一	坂ノ下中世墓群出土空風輪・空風火輪・火輪・水輪	
図版第七二	坂ノ下中世墓群出土板碑①	
図版第七三	坂ノ下中世墓群出土板碑②	
図版第七四	坂ノ下中世墓群出土板碑③	
図版第七五	坂ノ下中世墓群出土板碑④	
図版第七六	坂ノ下中世墓群出土板碑⑤	
図版第七七	坂ノ下中世墓群出土板碑⑥	
図版第七八	坂ノ下中世墓群出土板碑⑦	
図版第七九	坂ノ下中世墓群出土緑色凝灰岩製板碑・石仏①	
図版第八〇	坂ノ下中世墓群出土石仏②	
図版第八一	坂ノ下中世墓群出土石仏③	
図版第八二	坂ノ下中世墓群出土石仏④・如来坐像板碑	
図版第八三	坂ノ下中世墓群出土石造五輪塔組み合わせ復元状況	

挿 図 目 次

	頁
第1図 坂ノ下地区上空より見た敦賀バイパスと周辺の主要遺跡	2
第2図 坂ノ下遺跡群全体図（縮尺1／3,000）	5
第3図 敦賀平野の地形分類図（縮尺約1／150,000）	12
第4図 坂ノ下遺跡群の位置と周辺の遺跡分布図（縮尺1／75,000）	14
第5図 敦賀市出土土器実測図（縮尺1／4）	15
第6図 坂ノ下遺跡群調査区位置図（縮尺1／1,800）	21
第7図 坂ノ下遺跡出土土器実測図1（縮尺1／4）	22
第8図 坂ノ下遺跡出土土器実測図2（縮尺1／4）	23
第9図 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡調査区位置図（縮尺1／1,500）	27
第10図 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡A地区地形測量図（縮尺1／500）	28
第11図 明神山古墳群丑寅山支群A地区検出遺構実測図（縮尺1／250）	28～29
第12図 明神山12号墳墳丘測量図（縮尺1／100）	29
第13図 明神山12号墳墓壙実測図（縮尺1／25）	30
第14図 明神山13号墳墳丘測量図（縮尺1／100）	32
第15図 明神山13号墳墓壙実測図（縮尺1／25）	33
第16図 明神山14号墳墳丘測量図（縮尺1／100）	34
第17図 明神山14号墳墳丘断面実測図（縮尺1／100）	35
第18図 明神山14号墳墓壙実測図（縮尺1／25）	35
第19図 明神山15号墳墳丘測量図（縮尺1／150）	36
第20図 明神山15号墳墳丘断面実測図（縮尺1／150）	37
第21図 明神山15号墳墓壙実測図（縮尺1／50）	38
第22図 明神山16号墳横穴式石室礫床実測図（縮尺1／50）	39
第23図 明神山16号墳横穴式石室墓壙実測図（縮尺1／50）	40
第24図 明神山17号墳墳丘・竪穴式小石室等測量図（縮尺1／100）	41
第25図 明神山17号墳竪穴式小石室実測図（縮尺1／25）	42
第26図 明神山17号古墳群土壙墓実測図（縮尺1／50）	43
第27図 明神山古墳群竪穴式小石室実測図（縮尺1／25）	45
第28図 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡B地区地形測量図（縮尺1／400）	46
第29図 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡B地区検出遺構実測図（縮尺1／200）	47
第30図 明神山18号墳墳丘測量図（縮尺1／100）	48
第31図 明神山18号墳墓壙実測図（縮尺1／25）	49
第32図 丑寅山遺跡1号土壙実測図（上）・2号土壙実測図（下）（縮尺1／50）	50
第33図 明神山17号墳出土刀子実測図（縮尺1／2）	53
第34図 明神山古墳群丑寅山支群等出土土器実測図（縮尺1／4）	54
第35図 丑寅山遺跡出土縄文時代遺物実測図（縮尺1／3）	57
第36図 丑寅山遺跡出土縄文時代石鏃実測図（縮尺1／2）	57
第37図 明神山7・8号墳出土須恵器実測図（縮尺1／3）	59

第38図	坂ノ下中世墓群の調査範囲図（縮尺1／500）	63
第39図	坂ノ下中世墓群1号経塚（縮尺1／25）	64
第40図	坂ノ下中世墓群2号経塚（縮尺1／25）	65
第41図	坂ノ下中世墓群検出状況全体図（縮尺1／200）	66～67
第42図	坂ノ下中世墓群遺構番号図（縮尺1／200）	66～67
第43図	坂ノ下中世墓群石造物出土位置図（縮尺1／125）	66～67
第44図	坂ノ下中世墓群骨片出土位置図（縮尺1／125）	66～67
第45図	坂ノ下中世墓A群（方形区画部分）全体図（縮尺1／50）	70～71
第46図	坂ノ下中世墓A群1号墓実測図（縮尺1／25）	71
第47図	坂ノ下中世墓A群2号墓実測図（縮尺1／25）	72
第48図	坂ノ下中世墓A群3号墓実測図（縮尺1／25）	72
第49図	坂ノ下中世墓A群4号墓実測図（縮尺1／25）	73
第50図	坂ノ下中世墓A群5号墓実測図（縮尺1／25）	74
第51図	坂ノ下中世墓A群5号墓納骨坑実測図（縮尺1／25）	75
第52図	坂ノ下中世墓A群6号墓実測図（縮尺1／25）	75
第53図	坂ノ下中世墓A群7・8号墓実測図（縮尺1／25）	76
第54図	坂ノ下中世墓A群9号墓実測図（縮尺1／25）	77
第55図	坂ノ下中世墓A群10・11号墓実測図（縮尺1／25）	78
第56図	坂ノ下中世墓B群全体図（縮尺1／50）	80
第57図	坂ノ下中世墓B群14号墓実測図（縮尺1／25）	81
第58図	坂ノ下中世墓B群15号墓実測図（縮尺1／25）	82
第59図	坂ノ下中世墓B群16号墓実測図（縮尺1／25）	83
第60図	坂ノ下中世墓B群17号墓実測図（縮尺1／25）	84
第61図	坂ノ下中世墓B群18号墓実測図（縮尺1／25）	85
第62図	坂ノ下中世墓B群19号墓実測図（縮尺1／25）	86
第63図	坂ノ下中世墓B群20号墓実測図（縮尺1／25）	87
第64図	坂ノ下中世墓B群21号墓実測図（縮尺1／25）	88
第65図	坂ノ下中世墓B群22号墓実測図（縮尺1／25）	89
第66図	坂ノ下中世墓C群全体図（縮尺1／50）	90
第67図	坂ノ下中世墓C群23号墓実測図（縮尺1／25）	90
第68図	坂ノ下中世墓C群24号墓実測図（縮尺1／25）	91
第69図	坂ノ下中世墓C群25号墓実測図（縮尺1／25）	92
第70図	坂ノ下中世墓D群26号墓実測図（縮尺1／25）	94～95
第71図	坂ノ下中世墓D群石造標識墓群（27～51号）全体図（縮尺1／50）	95
第72図	坂ノ下中世墓D群27・28・29・30号墓実測図（縮尺1／25）	96
第73図	坂ノ下中世墓D群31・32・33号墓実測図（縮尺1／25）	97
第74図	坂ノ下中世墓D群34号墓実測図（縮尺1／25）	98
第75図	坂ノ下中世墓D群35・36・37・38・39号墓実測図（縮尺1／25）	99
第76図	坂ノ下中世墓D群40・41・42・43・44号墓実測図（縮尺1／25）	100
第77図	坂ノ下中世墓D群45・46・47号墓実測図（縮尺1／25）	101

第78図	坂ノ下中世墓D群48・49号墓実測図（縮尺1／25）	101
第79図	坂ノ下中世墓D群50・51号墓実測図（縮尺1／25）	102
第80図	坂ノ下中世墓D群52号墓実測図（縮尺1／25）	103
第81図	坂ノ下中世墓D群53号墓実測図（縮尺1／25）	104
第82図	坂ノ下中世墓D群54号墓実測図（縮尺1／25）	105
第83図	坂ノ下中世墓D群55号墓実測図（縮尺1／25）	106
第84図	坂ノ下中世墓D群56号墓実測図（縮尺1／25）	107
第85図	坂ノ下中世墓D群57号墓実測図（縮尺1／25）	108
第86図	坂ノ下中世墓D群58号墓実測図（縮尺1／25）	108
第87図	坂ノ下中世墓群出土蔵骨器実測図①（壺）（縮尺1／4）	111
第88図	坂ノ下中世墓群出土蔵骨器実測図②（壺その他）（縮尺1／4）	112
第89図	坂ノ下中世墓群出土陶磁器実測図（縮尺1／4）	114
第90図	坂ノ下中世墓群出土陶磁器片拓本図①（縮尺1／4）	115
第91図	坂ノ下中世墓群出土陶磁器片拓本図②（縮尺1／4）	116
第92図	坂ノ下中世墓群出土近世陶磁器実測図（縮尺1／4）	118
第93図	坂ノ下中世墓群出土土製品実測図（縮尺1／4）	118
第94図	坂ノ下中世墓群出土土師器実測図（縮尺1／4）	119
第95図	坂ノ下中世墓群出土銭貨拓本図（縮尺2／3）	121
第96図	坂ノ下中世墓群出土短刀・掛仏（部分）実測図（縮尺1／4）	121
第97図	坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図①（縮尺1／8）	123
第98図	坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図②（縮尺1／8）	124
第99図	坂ノ下中世墓群出土空風輪実測図③（縮尺1／8）	125
第100図	坂ノ下中世墓群出土火輪実測図①（縮尺1／8）	126
第101図	坂ノ下中世墓群出土火輪実測図②（縮尺1／8）	127
第102図	坂ノ下中世墓群出土空風火輪・火輪実測図（縮尺1／8）	128
第103図	坂ノ下中世墓群出土水輪実測図①（縮尺1／8）	129
第104図	坂ノ下中世墓群出土水輪実測図②（縮尺1／8）	130
第105図	坂ノ下中世墓群出土水輪・地輪実測図③（縮尺1／8）	131
第106図	坂ノ下中世墓群出土地輪実測図①（縮尺1／8）	132
第107図	坂ノ下中世墓群出土地輪実測図②（縮尺1／8）	133
第108図	坂ノ下中世墓群出土地輪実測図③（縮尺1／8）	134
第109図	坂ノ下中世墓群出土地輪実測図④（縮尺1／8）	135
第110図	坂ノ下中世墓群出土板碑分類案①（縮尺1／8）	137
第111図	坂ノ下中世墓群出土板碑分類案②（縮尺1／8）	138
第112図	坂ノ下中世墓群出土板碑分類案③（縮尺1／8）	140
第113図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図①（縮尺1／8）	141
第114図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図②（縮尺1／8）	142
第115図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図③（縮尺1／8）	143
第116図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図④（縮尺1／8）	144
第117図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑤（縮尺1／8）	145

第118図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑥（縮尺1／8）	146
第119図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑦（縮尺1／8）	147
第120図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑧（縮尺1／8）	148
第121図	坂ノ下中世墓群出土板碑実測図⑨（縮尺1／8）	149
第122図	坂ノ下中世墓群出土石仏実測図①（縮尺1／8）	150
第123図	坂ノ下中世墓群出土石仏実測図②（縮尺1／8）	151
第124図	坂ノ下中世墓群出土石仏実測図③（縮尺1／8）	152
第125図	坂ノ下中世墓出土五輪塔水輪梵字拓本図（縮尺1／3）	155
第126図	坂ノ下中世墓群出土板碑・地輪梵字拓本図	156
第127図	坂ノ下中世墓群出土石造五輪塔組み合わせ復元想定図	158
第128図	敦賀市内所在寺院にある記年銘のある板碑	159

表 目 次

	頁
第1表	坂ノ下遺跡群周辺の遺跡一覧表 14
第2表	敦賀市内出土土器観察表 19
第3表	坂ノ下遺跡出土土器観察表 25・26
第4表	北陸地方の主要調査古墳における墓壇底面の深さ一覧表 52
第5表	明神山古墳群丑寅山支群出土土器観察表 56
第6表	明神山古墳群一覧表 60
第7表	坂ノ下中世墓群概要一覧表 67
第8表	坂ノ下中世墓群出土石造物一覧表 68
第9表	坂ノ下中世墓群骨片出土一覧表 69
第10表	坂ノ下中世墓群出土空風輪各部位比率グラフ 125
第11表	坂ノ下中世墓群出土水輪各部位比率グラフ 128
第12表	坂ノ下中世墓群出土地輪各部位比率グラフ 131
第13表	坂ノ下中世墓群出土空風輪法量表 153
第14表	坂ノ下中世墓群出土火輪法量表 154
第15表	坂ノ下中世墓群出土水輪法量表 154
第16表	坂ノ下中世墓群出土地輪法量表 154
第17表	坂ノ下中世墓群出土骨片の重量一覧表（A・B・C群） 167
第18表	坂ノ下中世墓群出土骨片の重量一覧表（D群） 167
第19表	坂ノ下中世墓群出土の骨種別重量と総重量比（A・B・C・D群） 168
第20表	坂ノ下中世墓群頭骸骨観察地点表（A・B・C群） 171
第21表	坂ノ下中世墓群頭骸骨観察地点表（D群） 171
第22表	坂ノ下中世墓群側頭骨観察個数表（A・B・C群） 172
第23表	坂ノ下中世墓群側頭骨観察個数表（D群） 172
第24表	坂ノ下中世墓群人骨所見一覧表（A・B・C群） 176
第25表	坂ノ下中世墓群人骨所見一覧表（D群） 176
第26表	坂ノ下中世墓群人骨の年齢構成一覧表 180

第1章 序 記

敦賀市の坂ノ下地区に遺跡の存在することが初めて報告されたのは、大正4（1915）年のことであろう。『敦賀郡誌』には、この地区の古墳について、「中郷村坂下、田圃の間にあり。12、3年前塚上にありし樹木を伐採して発掘す。3尺に6尺余の壙あり、土器を発見せりと云う」と記されている。この記述によると、既に明治35、6（1902、3）年には、坂ノ下地区において遺跡（古墳）の存在が一般に知られており、その発掘と土器の出土があったことが窺える。

その後、大正9（1920）年には、上田三平氏も『福井県史蹟調査報告 第1冊』で、「坂ノ下古墳」として、「中郷村大字坂ノ下常宮神社付近に数個の古墳あり、社殿の東約12間の藪中にあるものは猶円塚の形式を示し、西南向にて高さ5尺、2個の巨石が露出して居る。又社殿の西畑地の中にも曾って石室を発見し種々の副葬品を得たと云う事である」と述べている。この中で、上田氏のいう副葬品出土の件に関しては、おそらく前述の明治35、6年の発掘について、地元の人々の間に伝えているところがあったのかと思える。

さらに、昭和31（1956）年には、石井左近氏は『敦賀市通史』で、やはり「坂ノ下の古墳」として、次のように記している。

「区の鎮守は常宮神社と称し、古さびた椎の大木が多い。これに続いた宮ノ前地籍に通称『タモの木』といていた小塚の上にタモの巨樹があったのを伐採した際に、一つの石室を発見した。この中から折損した直刀が2、3振と土器多数および金環・銀環などを出土した。また、石廊（槲の誤植か。以後同じ）に使用されていた大石が現在でもその付近に散在している。なお、その近くにショウ塚と称するものと、さらに1基の小塚が存していたが、田畑開墾で破壊されてしまったという。ここからも土器多数を出土したが、神社のすみに埋蔵され、石廊の大石が積み重ねてあるので、正確な測定や副葬品の種類や埋蔵状態などの詳しいことは知る由もない。現在も社殿の背後の竹林中に2基と、社前の右側境内隣接の竹林中に1基の円墳が現存していて、大きな天井石の一部が露出している。この坂ノ下部落には神社付近のみならず、先年農道開墾の時にも石廊の一部と土器を発見したが、地表の外形を除削したので今ははっきりしていないという」

つまり、坂ノ下地区における古墳の所在について、より一層詳しく報告している。ただし、昭和31年以前には、既に一部の古墳は破壊されて消滅してしまったことが窺える。あるいは、その記述内容から見て、古墳の破壊はさらに古く遡り、上田三平氏の踏査時には既に若干の古墳は消滅していた可能性もある。

さて、その後、昭和51（1976）年5～10月には、福井県教育庁文化課（以下「県教委」と略す）が敦賀市東部地区で分布調査を実施したが、この坂ノ下地区の常宮神社周辺の平地には全く古墳の姿は見られない状態であった。つまり、既に今日までに、これらの古墳の大部分は破壊されたものと思われる。ところが、同年には、県教委は一般国道8号敦賀バイパス（以下「敦賀バイパス」と略す）に接続する北陸自動車道敦賀第2インター建設予定地で、工事によって初めてその存在が



第1図 坂ノ下地区上空より見た敦賀バイパスと周辺の主要遺跡

あきらかになった中遺跡の緊急発掘調査を実施していた。その年の12月、敦賀市教育委員会社会教育課（以下「市教委」と略す）によって、坂ノ下地区で全く新たな古墳の存在が確認されることとなった。当時、既往の敦賀バイパス建設予定地内の古墳の有無確認結果に懸念を抱いていた市教委では、その南部区間にあたる坂ノ下地区東部の丘陵上の踏査を実施した。その結果、明神山で新たに3基の古墳（後の明神山1～3号墳）を発見するに至った。そこで、県・市両機関の職員で再度現地を踏査し、その中に前方後方墳が混在することを確認した。とりわけ、明神山1号墳は、それまで敦賀地域における前方後円（方）墳の存在は未確認であったのであるが、初めてのその種の古墳の発見であり、かつ葺石も具えていたため、大きな扱いで新聞報道されることとなった。

こうして、バイパス建設予定地内に古墳群が分布しているという新事実を知った建設省近畿地方建設局福井工事事務所（以下「建設省」と略す）では、その後昭和55（1980）年9月に、改めて残余の遺跡の有無確認を含む再協議を県教委に申し入れた。そして、同月29日には、県教委の職員立会いのもと、明神山古墳群の現地における個別の遺跡確認の作業を行った。その結果、建設予定地の丘陵の内外には、それまで市内では未発見であった前方後円墳1基の初めての確認をも含めて、総数16基余りの古墳から構成される明神山古墳群と、9箇所余りの屋敷跡かと推定される平坦地とが散在していることが判明した。すなわち、古墳群に関する限り、明神山古墳群は敦賀市内でも最も顕著な例の一つであることが明確になった。ただし、明神山古墳群の分布する坂ノ下地区東部丘陵は、建設省による敦賀バイパス建設の設計では、既にオープン・カットで施工される計画が決定していた。そこで、気比史学会・市教委ならびに県教委では、建設省に明神山古墳群の重要性を指摘するとともに、保存のための建設予定路線の設計変更を要望した。

一方、建設省では敦賀・金山両バイパス建設予定地内の水田部分についても、改めて遺跡の有無を確認する必要に迫られ、県教委と協議を実施した。そして、昭和56（1981）年4月13日に、中

地区（中2工区）から坂ノ下地区のJR西日本線と交差する箇所（坂ノ下3工区）までの区間約1.2kmについて、遺跡の存否確認作業を行った。作業は、県教委職員の立会いのもと、各水田を1枚ごとに重機による掘削によって遺物包含層の存否の確認を実施し、緊急事前発掘の必要性の有無の判別を行ったものである（この段階で、新たに吉河集落に西接する箇所において遺跡の存在する可能性が浮上した）。

この時、坂ノ下地区においては、「十二字藪下」「二十六字宮ノ前」の西部、「二十七字烏帽子形」などについて数箇所の掘削を行った。ただ、その中間の「十九字羽折（織）」「二十六字宮ノ前」のそれぞれの東部については、ごく若干ではあるが地表面で土器片が採集でき、遺跡の存在が疑われたにもかかわらず、作物が栽培されていたため試掘は不可能であった。そこで、この箇所についてのみは、作物の収穫を待って改めて人力で試掘を実施することとなった。

なお、その後、明神山古墳群については、建設省から建設予定地内の丘陵の比高差が小さく、かつ、軟弱な土質の関係からも設計の変更が極めて困難な状況ではあるが、設計変更するに足るだけの比高差がある箇所の全長約140mの区間については、オープン・カットをトンネルに工法変更する見解が示された。よって、丘陵稜線上に所在する、古墳群内でも中核をなす古墳等は、そのほとんどが保存される見通しとなった。

それでも、比高差が小さくトンネルに設計変更で保護を図ることが不可能な箇所が、明神山古墳群の一部に残り、その箇所に存在する遺跡については緊急発掘調査を実施し、記録に止めざるを得ないこととなった。このようにして、古墳群内でも北部派生尾根上に所在する遺跡を、事業名「明神山古墳群堂坂支群ならびに屋敷跡」として調査を実施する運びとなった。（中司）

注① 上田三平『福井県史蹟調査報告』第1冊、1920年。

② 石井左近『敦賀市通史』1920年

③ 参考までに記すと、現集落に西接し常宮神社の北方にあたる箇所が「二十六字宮ノ前」、明神山古墳群南部の支群に西接し、神社の南方にあたる箇所が「二十五字宮ノ上」、神社の西方にあたる箇所が「三十一字タモノ木」である。なお、「二十五字宮ノ上」に南接して、「三十六字狐塚」の字名も残っている。今後、坂ノ下地区の平地については、消滅古墳に関する埋没遺構などの存否の確認調査や検証が不可欠であるといえよう。

④ 現地踏査にあたったのは、市教委の前田 優・熊谷広幸両氏である。

⑤ この間、いち早く昭和55年12月に保存陳情書を建設省に提出され、その後も倦むことなく古墳の保存を要望された気比史学会に敬意を表する次第である。また、文化財保護のために英断を下された建設省の関係者に対しても、深く謝意を表したい。昭和63（1988）年3月23日、明神山古墳群1～3・9・10号墳は、向出山古墳群1・3・4号墳と合わせ「中郷古墳群」と総称して、国の史跡に指定された。

第2章 調査の経過

第1節 坂ノ下遺跡

1 調査の経過

第1章で記述したように、昭和56（1981）年4月13日の、バイパス建設予定地内における遺跡の有無確認が実施できなかった箇所において、調査を行った。この箇所は、「十九字羽折（織）」「二十六字宮ノ前」のそれぞれの東部で、同年秋の作物収穫後、吉河遺跡の調査と並行して試掘調査を実施した。調査期間は、昭和56年10月6日から13日までの計5日間である。試掘面積は121.5m²である。

試掘調査は、まず未確認地区である「十九字羽折（織）」に第1～第3の、「二十六字宮ノ前」に第4・第5の合計5箇所のトレンチを設定して行った。その結果、どのトレンチにおいても、耕作土下に遺物包含層の存在が確認でき、弥生土器を中心とする若干の遺物が検出できた。が、遺構の存在は全く確認し得なかったため、調査は確認に止め、遺物を採集して終了することとした。

2 調査日誌抄

昭和56年

10月 6日 吉河遺跡の作業員の一部で、坂ノ下遺跡に第1～第3トレンチを設定。耕作土除去を開始。

10月 7日 第1～第3トレンチとも遺物包含層に達し、土器片若干がそれぞれ出土。

10月 9日 第1トレンチ南端部を東方に拡張。土器片若干が出土。

10月 12日 第4トレンチを設定。土器片若干が出土。各トレンチの位置図・断面図を作成。

10月 13日 第5トレンチを設定。土器片若干が出土。トレンチの断面図を作成。

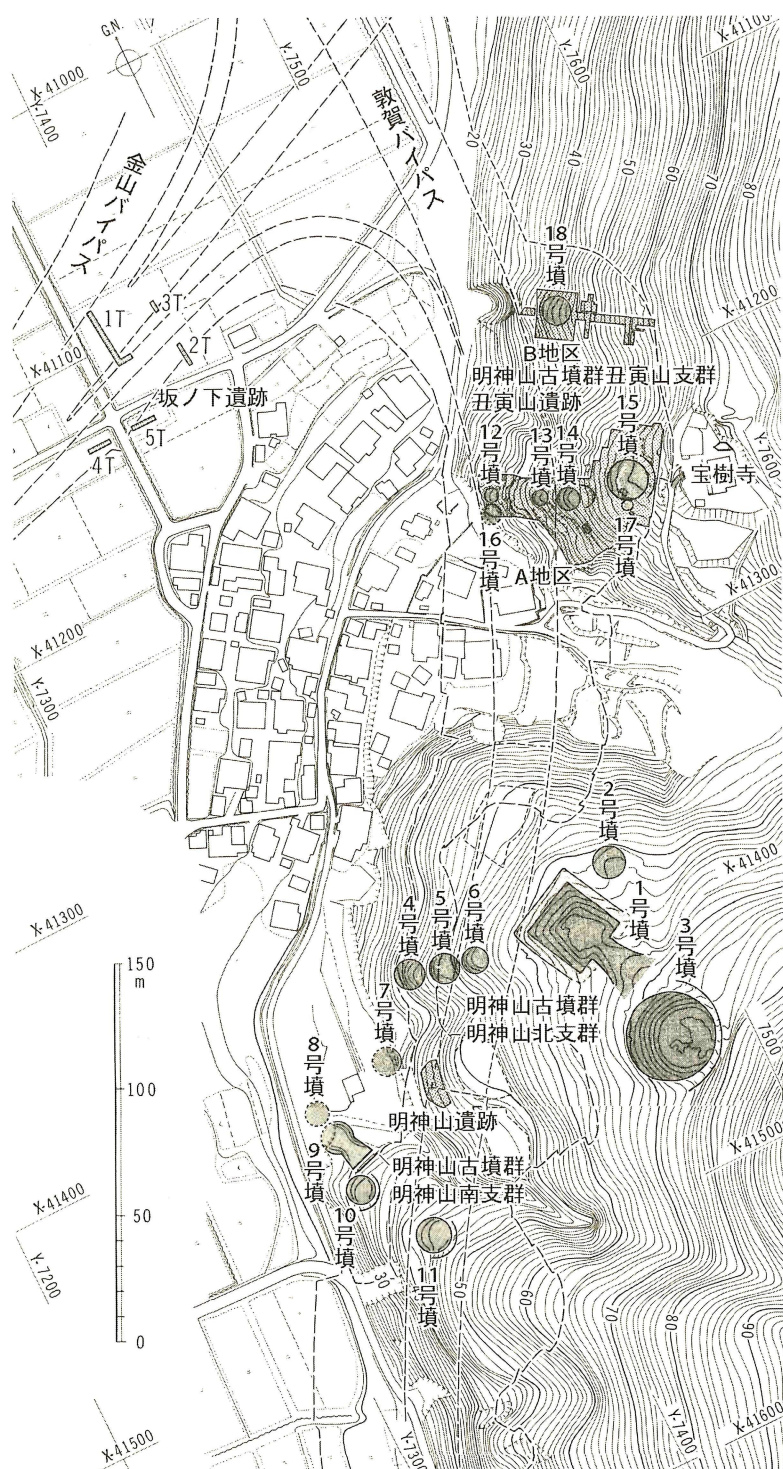
なお、本遺跡の調査関係者の大部分は、明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡の調査関係者と重複するため、記名を省略し、次節で列記することとした。（中司）

第2節 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡・坂ノ下中世墓群

1 調査の経過

明神山古墳群丑寅山支群および丑寅山遺跡の調査は、敦賀バイパス建設により破壊される箇所を調査対象とし、昭和60（第一次調査）、同61（第二次調査）の両年に実施した。以下、調査の経過について略述する。

上述のように第一次調査は昭和60年に実施した。調査期間は、4月3日から12月28日まで計141日間である。調査は、立木の伐採から開始し、6月7日にはこの作業を終えた。また、この期間中の5月8日には作業員一同によって仏式の供養式を行った。さらに、この後、調査前の地形測量図作成にあたり、7月下旬には地形測量を終了した。



第2図 坂ノ下遺跡群全体図 (縮尺1/3,000)

続いて本格的な発掘に着手したが、本古墳群の現況が竹林を含む雑木林であったため、表土剥ぎ作業から難航した。表土剥ぎは、丑寅山支群が立地する小丘陵先端部より開始し、丘陵基部へと進行することとした。また、これと並行して各古墳に外接溝の有無確認のためのトレンチを設定し、調査を実施した。8月中旬には小丘陵上に立地する古墳の表土剥ぎ作業をほぼ終了し、トレンチ調査の結果も併せ、この区域に現存する古墳数は3基（明神山12～14号墳）と判明した。なお、古墳が想定された明神山12・13号墳間の箇所からは、遺構・遺物の検出を見なかった。

8月下旬からは、明神山12～14号墳の墳丘および外接する溝の検出作業に着手した。作業は明神山14号墳より開始し、8月末には本古墳の墳丘および溝の検出を終えた。

また、明神山14号墳を調査中の8月末には、

調査区北方の小支脈において、全く新たに古墳1基を発見した。そして、この箇所も建設予定地内に含まれていることから、建設省とその取り扱いについて協議を行い、新発見の古墳（明神山18号墳）およびその周辺地区を発掘調査の対象に含めることに決した。そこで、当初からの調査予定地区をA地区、新たに加わった箇所をB地区と呼び分けることにした。また、工事施工上の関係からB地区の調査を優先してほしいとの建設省の要請に従い、A地区の発掘を調査時の状態のままで一時的に凍結することとした。

B地区の調査は、地形測量図作成後、9月3日より開始した。調査区は、明神山18号墳周辺および小支脈に設定した、遺構の存否確認のためのトレンチである。明神山18号墳の表土剥ぎおよび墳丘・溝の検出は、10月初旬に終了した。また、この間、トレンチ調査区内では土壌の検出をみたが、ほかに遺構の存在は無く、調査を終了した。このほか、明神山18号墳の南方では、炭化物・焼土塊を混入するピット群を検出した。B地区の発掘面積は、482m²である。

10月初旬からはA地区の調査を再開し、B地区では遺構測量に着手した。同月中旬にはA地区の明神山12・13号墳の墳丘および溝の検出を終え、B地区の遺構測量も完了した。同月下旬には、B地区の明神山18号墳の埋葬施設の検出作業を実施し、図面作成・写真撮影等を行い、10月末日をもって同地区を建設省に引き渡した。また、この期間中A地区では、調査区南端に存在する平坦部および緩斜面の表土剥ぎを実施した。

11月初旬には屋敷跡と想定した丘陵頂部の平坦部に、遺構内容把握のためのトレンチを設定し、調査を開始した。また、明神山12～14号墳では、土層図等の作成および写真撮影を実施した。中旬には、屋敷跡のトレンチ調査区内において、古墳（明神山15号墳）の溝と思える遺構を検出したほか、多数の石組遺構を検出した。11月末には明神山12～14号墳および周辺の土層図作成作業を終了し、セクション用の土手を除去した。

12月初旬からは、明神山12～14号墳の遺構測量を開始するとともに、各古墳に対して埋葬施設確認のためのトレンチ調査を開始した。また、調査区南端の斜面で検出した土壌の調査に着手し、土壌内埋土上層より完形品の土師器壺2個の出土を見たことから、土壌墓である可能性が生じた。そのほか、明神山12号墳南方で集石の存在を確認し、調査を開始した。同月中旬には、遺構測量作業も終了し、埋葬施設の検出に取り掛かる。一方、集石と考えていた遺構が、大規模な破壊を受けた横穴式石室の残存部であると判明し、石室の掘り方等を検出した。下旬には明神山12号墳の埋葬施設を検出し、同16号墳の石室を含めて図面作成・写真撮影を行い、これら両古墳の調査を終了した。ところで、12月中旬には初雪を見たため、越冬準備のため下旬からは遺構の土嚢による埋め戻し、調査区内のビニール・シート張りの作業も併せて実施し、12月28日の器材撤収をもって第1次調査を終了した。

（工藤）

第二次調査は、昭和61（1986）年に実施した。調査期間は、3月7日から11月8日までの156日間である。この調査は、3月上旬を待って除雪、現場事務所設営から着手した。古墳の調査では、昭和60年末で一旦中断していた明神山13・14号墳の発掘を再開し、埋葬施設を検出した。そして、下旬に同古墳の埋葬施設の実測と写真撮影を行い、年度末で再び作業を一時中止した。

昭和61年度の調査は、4月下旬に開始した。まず、明神山13・14号墳の作業の未了部分を実施す

るとともに、新たに屋敷跡想定地区の調査にも着手し、杭打ちを実施後、表土掘削を開始した。しかし、屋敷跡想定地区では作業が進捗するにつれて多数の石造物が検出され、中世墓群であることが判明した。作業自体は、石造物を中心とする中世遺構の検出を最優先としたが、足の踏み場もないほどの自然石や石造物が累々と現れて、遅々として進まなかった。また、表土掘削の過程で、蔵骨器や骨片等が出土することなどから、かなり攪乱を受けていると考えられた。

ところで、表土掘削中に須恵器数片も出土し、中世墓群の下層の古墳は、前年度までの調査成果より古墳時代前期に属する可能性が強いことから、これらの須恵器に伴う遺構が調査区内に別に存在するのではないかと予想された。そして、調査区南部では竪穴式小石室を有する小円墳が検出された。さらに、南接して、かなり崩壊しているもののもう1基竪穴式小石室が検出された。

梅雨明けの7月下旬には、中世遺構群の個別の墓の撮影と平面図の作成にかかり、また、末日には土手を全て除去して中世遺構群の全景撮影を実施した。特に個別写真については、石や石造物の配置などから一定のまとまりごとに撮影を行った。8月中旬には、それまでの担当者である中司に替わって、新たに朝倉氏遺跡資料館の岩田 隆・南 洋一郎両氏の来援を請い、実測を続行した。この作業を通して、中世墓群は連接する方形区画で構成される一群、独立する方形区画で構成される一群、主に並ぶ石造物で構成される一群、の3群に分かれていると思われた。

9月中旬より、中世墓群の解体作業に入った。しかし、作業が進んでも期待した蔵骨器の大量出土は見られず、拍子抜けした感があった。骨片の多くは明確な埋納施設が検出されず、解体作業中不意に土中より直接出土する場合がほとんどであった。解体作業が終わりに近づいた下旬になって、D群と呼び分けた遺構の南側で石を2、3段に積んだ石垣状遺構が検出された。この遺構は、その後の解体作業の結果、中世に属するものであることが判明したが、さらに南方で調査区外の宝樹寺の境内に延びることが確認されたのみで、規模は明確にしえなかった。

また、10月上旬に入って開始した古墳の墳丘の検出作業中にも、A群と呼び分けた遺構の東側で新たな中世墓群が検出された。これらの実測等は古墳の調査と並行して行った。さらに、中世遺構群の下層では、古墳の墳丘に張り付くようにして集石2基が検出された。これらは形態が中世墓とは異なり、骨片等が全く伴わないことから、経塚ではないかと判断した。なお、この内の1基については経筒の埋納坑らしき小穴の存在を確認している。

一方、古墳の調査においては、墳丘の表面のごく一部の設置ではあるが、県下では類例の乏しい葺石を検出しえた。また、埋葬施設としては、土壙1基を検出した。ただし、副葬品はなんら出土せず、古墳の時期を特定しえなかった。調査区の北部に位置し、調査途上から古墳ではないかと見なしていた箇所は、断ち割った結果単なる自然丘陵であることを確認した。

11月上旬には、古墳の測量を行い、これを最後に本遺跡の調査は終了した。そして、現地において記者発表を実施し、器材の撤収と現場事務所の撤去を行って、現場の作業を終了した。

なお、第一次と第二次に分けて行ったA地区の発掘総面積は、 $2,027.5\text{m}^2$ である。さらに、中世遺構の調査終了後、明神山15号墳の墳丘検出のために改めて掘削して調査を実施したが、その面積は約 296m^2 である。したがって、A地区における発掘面積は都合 $2,323.5\text{m}^2$ になる。(赤澤)

2 調査日誌抄

第一次調査（昭和60年）

- 4月3～19日 吉河遺跡の調査と並行して、丑寅山遺跡の立木伐採の作業を開始。
- 4月22～26日 伐採と並行して作業用通路・階段の取り付けに着手。
- 5月8日 春の連休で作業が中断していたが、調査再開。センター所長・坂ノ下区長なども参加して、発掘作業員一同で主催した仏式の供養式を挙行。
- 5月13～30日 吉河遺跡第6次調査の航空測量の準備のため、立木伐採の作業を一時中断。
- 6月3日 男子作業員のみで立木伐採の作業を再開。
- 7月26日 発掘前の地形測量に着手。
- 7月29日 本日より表土掘削、まず明神山12号墳から開始。
- 7月30・31日 明神山13・14号墳にもトレンチを設定し、表土掘削を開始。
- 8月23日 調査区最高所の屋敷跡想定地区の草刈を行い、発掘前の全景の写真撮影。
- 8月24～27日 明神山13・14号墳の周辺部の表土除去。
- 8月28日 調査区北方の派生支脈上で、建設省による伐採作業が進行していたが、その結果からうじて識別しうる程度ではあるが、古墳状のかすかな隆起が存在していることに気づく。
- 8月29日 前日検出した溝によって新発見の古墳（明神山18号墳）の存在が判明したため、建設省に緊急発掘の必要があることを通告。
- 8月30日 着工を目前にしたB地区から調査するため、この地区の発掘前の地形測量を開始。
- 9月2日 明神山18号墳発掘前の全景写真撮影後、表土掘削を開始。
- 9月5日 明神山18号墳の調査と並行し、その東方にその他の遺構の存否を確認するためのトレンチを設定。これ以後、適宜トレンチを拡張して調査。
- 9月6～18日 明神山18号墳周辺部の表土除去を継続。
- 9月27～30日 トレンチの断面図作成のための清掃、土壌を検出。
- 10月1日 明神山18号墳の表土除去が終了し、全景撮影。
- 10月2～8日 トレンチ断面実測。A地区の調査も再開。
- 10月9日 実測用土手を除去後の明神山18号墳の全景を写真撮影。
- 10月11日 文化庁記念物課河原純之主任調査官が来跡。
- 10月12日 明神山18号墳の遺構測量を開始。
- 10月16日 敦賀市老人大学60名が来跡。
- 10月20～25日 明神山18号墳の埋葬施設を検出。墳丘の全景と埋葬施設を写真撮影。その後、切断。
- 11月5・9日 屋敷跡想定地区の調査を開始。青磁片出土。南部では古墳の溝らしき遺構を検出。
- 11月11日 明神山12～14号墳の遠景を写真撮影。明神山12号墳南方において礫床、須恵器蓋を検出。
- 11月14日 明神山13・14号墳の土層断面を実測。
- 11月16～22日 明神山12～14号墳の土層断面を実測、写真撮影。
- 11月27日 明神山12～14号墳の土手を除去し、写真撮影。

- 12月2日 明神山12～14号墳の墳丘測量を開始。
- 12月3日 明神山12～14号墳の埋葬施設を確認のためのトレンチ調査を開始。
- 12月4・5日 土壙墓の発掘を開始。断面実測。供献土器の出土状況の写真撮影。
- 12月6日 明神山12～14号墳の墳丘を切断。
- 12月14～21日 明神山16号墳の横穴式石室の礎床を除去、墓壙を検出。平面・断面を実測。
- 12月21～24日 明神山16号墳の横穴式石室墓壙の写真撮影。同12号墳の墓壙を確認。土層断面を実測。墳丘の全景と墓壙を写真撮影。
- 12月25日 明神山12号墳の墓壙を実測。終了後墳丘を切断し盛土下に黒色土の存在を確認するが、古墳築造前の窪地であると判明。器材を撤収し、調査事務所を撤去。
- 12月28日 建設省と協議の結果、雪崩防止のため、明神山12・13号墳の間に防護柵を設置。
- 第二次調査（昭和61年）
- 3月7日 調査事務所を再設置。
- 3月12・15日 明神山13・14号の埋葬施設を確認。土層断面を実測。
- 3月21～25日 明神山14号墳の埋葬施設、土壙墓を実測、写真撮影。現場での作業を一時中止。
- 4月22・23日 作業を再開して屋敷跡想定地区にグリッドを設定、表土掘削に着手。以後グリッドごとに表土掘削を行う。
- 4月26日 明神山14号墳の全景を写真撮影。中世墓群では調査区北部の一群をD群、同南部の一群をB群、同南東部の一群をA群、と便宜的に呼称することとする
- 5月8日 A群で四耳壺出土。
- 5月12日 D群で天文十六年銘の凝灰岩（笏谷石）製の板碑出土。
- 5月21日 区域外に石造物の出土が連続するため、北方に調査区を拡張。
- 5月28日 調査区南部の黒褐色土層より須恵器数片が出土。
- 6月4日 敦賀市文化財審議会柴田源三郎委員と敦賀市立図書館竹中純之館長が来跡。
- 6月10～13日 石造物を水洗して、土手を残した状態の中世墓群を写真撮影。
- 6月20日 D群で三筋壺出土。
- 6月24日 調査区中世遺構面の土層断面を実測。
- 6月27日 調査区南部で縦穴式小石室を検出（明神山17号墳）。刀子1口のみ出土。石室の埋土を水洗いしたが、遺物は見られなかった。
- 7月1日 D群で底部を打ち欠いた播鉢が伏せられた状態で出土。西川数丸県教委文化課長が来跡。
- 7月7日 明神山17号墳の石室を実測。同古墳に南接して同様な縦穴式小石室を検出。同15号墳南方の黒色土の落ち込みを発掘。
- 7月18日 縦穴式小石室を写真撮影・実測。
- 7月19日 中世墓群の個別写真を逐次撮影。
- 7月23日 名古屋大学植崎正一教授等が調査見学に来跡。
- 7月25日 中世墓の実測を個別に開始。

- 7月29日 土手をはずした中世墓群の全景を写真撮影。
- 7月31日 中世墓実測用の遣り方の枠を組み始める。
- 8月9日 遣り方の設定を終了し、以降実測作業を継続。
- 8月18日 本日より朝倉氏遺跡資料館の岩田隆・南洋一郎両氏の応援を仰ぐ。
- 8月22日 A・B両群の平面図作成が終了して、見通し図作成の作業に移る。
- 9月2日 D群の平面図作成が終了し、石造物が並ぶ部分の見通し図作成。
- 9月5日 D群の見通し図作成が終了。中世墓の部分・見通しの写真撮影。
- 9月8日 原位置より移動したと考えられる石造物や石を除去。特に、B群は確実に中世墓に伴う石造物は1基も存在しないことが判明。
- 9月11日 断面図作成しながら中世墓の解体作業を開始。蔵骨器が多数出土することを想定。
- 9月12日 A群の懸仏が出土。上方から流下したものと推定。D群地輪下より瀬戸灰釉の小壺が出土。
- 9月13日 A群墓道を中心とする写真撮影。
- 9月24日 A群北部で黒色土の落ち込みを確認。トレンチで調査の結果、古墳の溝の埋土と判明。地輪が並ぶ列に平行してトレンチを設定。蔵骨器や明確な土壙は検出できなかった。
- 9月26日 D群南部で石を2、3個積んだ石垣状遺構を検出。B群は解体が進むが、蔵骨器やまとまった人骨の出土がなく、墓の構造が明確に判別できず。A群で石組みの埋納施設を検出。
- 9月27日 D群中世墓の解体作業が終了し、下層の遺構の有無を確認。
- 9月30日 A群中世墓の解体作業を終了。
- 10月3日 B群中世墓の解体作業を終了。中世遺構面の写真撮影。撮影終了後、中世遺構面を掘り下げ、古墳遺構面の検出に努める。
- 10月3日 明神山15号墳の東方（A群中世墓上段）を掘削、新たに中世墓を検出。
- 10月10日 新たに検出した中世墓（C群とし、これまでのC群をD群と変更する）の写真撮影を行い、実測作業に着手。明神山15号墳北方の高まりに確認のトレンチを設定。併せて、明神山15号墳の埋葬施設検出のための発掘区を設定。中世遺構面より下層で集石遺構2基を検出。経塚かと推定。
- 10月16日 石垣状遺構の解体中に瓶子出土。
- 10月20日 石垣状遺構の内部施設を写真撮影、実測。
- 10月24日 前年度調査区と明神山15号を含めて航空撮影。同古墳の埋葬施設の形を確認。
- 10月28日 明神山15号埋葬施設の埋土断面を写真撮影・実測。同古墳の近景と周辺より遠景を撮影。
- 10月29日 C群中世墓の解体作業を開始。明神山17号の周溝を確認。
- 11月1日 古墳時代遺構面の地形測量を開始。器材・遺物等の撤収作業に着手。
- 11月4日 埋蔵文化財調査センター藤原武二所長を迎えて、現地で記者発表。
- 11月8日 全ての現地調査を終了。器材・遺物のセンターへの搬入を終了。

現地調査終了後、すぐに遺物整理作業を開始した。期間は、昭和61年11月9日から、平成元年3月末までの2年余りである。出土した人骨片については、水洗と可能な限りの接合を行い、また、脆弱な箇所についてはパラフィンを用いて補強した。さらに、鑑定を富山医科薬科大学第一解剖学教室の松田健・森沢佐茂両先生に依頼した。

なお、本遺跡の調査関係者は下記の通りである。

調査事務局（福井県教育庁文化課）

西川数丸・川島英治（以上、前文化課長）、出口和夫（現文化課長）、上杉 命・上下光夫（以上、前同課長補佐）、大谷刀一（現同課長補佐）、清水光重（前同文化振興係長）、岡田敏雄（現同係長）、中西雅夫（前文化財保護係長）、北川俊憲（現同係長）、田川時子・島田英夫・松本法子（以上、前主事）、玉村直樹・宇野正志・南 泰美（以上、現主事）

発掘調査員 中司照世（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター主査）、工藤俊樹・赤澤徳明（以上、同文化財調査員）、岩田 隆・南 洋一郎（以上、福井県立朝倉氏遺跡資料館主査）

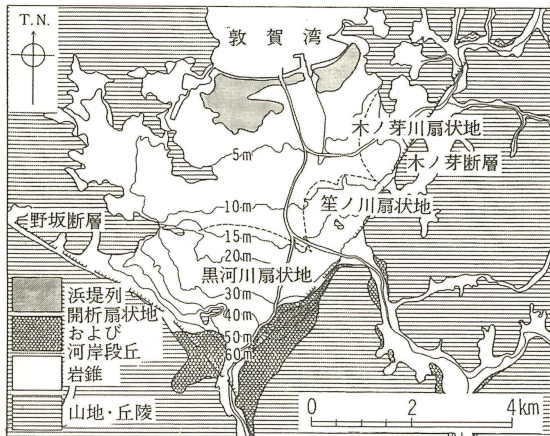
発掘調査補助員 川村俊彦（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター臨時職員）、月輪 泰（大谷大学大学院生）、清水敦子（国学院大学生）

発掘調査作業員 成田清一・寺腰繁三・成田はるえ・成田みよ・飯田千津枝・関 孝子・鈴木紀子（以上、坂ノ下区）、山口正雄・滝口 勝・武内みちゑ・山口よしえ（以上、吉河区）、納谷りよ子・納谷和代・草崎ふさえ・草崎和美・坂口良子・吉見ミヤ子（以上、深山寺区）、坪塚つた子・茶谷久枝・高木つわ子・中村佐智子（以上、檜曲区）、山本すて（高野区）、高橋良枝・北野きぬ枝・中原美津子・萩原幾子（以上、余座区）、小西範子（大蔵区）、牛鬼和枝・竹内をみ（以上、井川区）、和田敏男（津内）、田辺幸子（松原町）、山口よし江（親和町）

遺物整理作業員 伊内スミ子・川崎順子・梅原道代・吉川みどり・高岡紀子・細田栄子・斎藤律子・斎藤紀子・石塚則子・坪田啓子・田中千鶴美・木村恵美・島田雅代・亀井宏江・五十嵐敦子・幸馬幸江・柳原睦美・長谷川涼子・中野博恵・脇本雅代・石谷孝子・荒川恵子・吉村佳恵・竹田一美（赤澤）

第3章 周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境



第3図 敦賀平野の地形分類図 (縮尺1/150,000)

坂ノ下遺跡群は、福井県敦賀市坂ノ下に位置する。

坂ノ下遺跡群の所在する敦賀市は、福井県のはば中央に位置し、周囲を木ノ芽・越美・野坂の各山地と敦賀湾に囲まれた、東西南北各約5 kmの扇状を呈する敦賀平野をその中心としている。以下、敦賀平野の地形について、概括的に記述することとする(第4図)。

琵琶湖北岸の野坂山地内には、本州大破砕帯の一部を形成する断層・地溝が多数存在するが、その一部は野坂断層・木ノ芽断層として敦賀平野南東および西の縁辺に顕著な階段状の断層崖を見せており、平野の生成はこれら断層線に沿った地盤の沈降作用によると考えられている。敦賀平野に流入する主要な河川は、野坂山地内を源とする黒河川・筥ノ川と木ノ芽山地内を源とする木ノ芽川であり、平野内で合流し、筥ノ川となって敦賀湾へと注いでいる。これら3河川は、平野流入に伴い、それぞれ黒河川扇状地・筥ノ川扇状地・木ノ芽川扇状地と呼称される扇状地を平野南部～東部に連続的に形成しており、この一帯を複合扇状地としている。また、主要3河川の山間部および山間出口部には、洪積世の形成にかかわる解析扇状地・河岸段丘が存在する。これに対し、平野北端部には、「気比の松原」として著名な浜堤が形成されている。この浜堤は形成時期を異にする3列の浜堤列から成り、その形成は弥生時代中期以前と考えられている。なお、現在この浜堤東部は、開発によりその旧景を失っている。扇状地と浜堤に挟まれた平野中央部は、地表の勾配が緩慢な地域であり、潟湖上を河川堆積物が埋積した三角州低地となっている。このほか、平野東部と西部の出入りの著しい山脚周辺の地域には、背後の山地の沈降により生じた湿地帯(溺れ谷)が、また平野北西部の山麓には、風化岩屑により形成された岩錐が、それぞれ特徴的な地形として認められる。このように敦賀平野の地形は大きく分けて、北端海岸線の浜堤・平野中央部の三角州低湿地・平野南および西縁山際の扇状地、の3つから成るといえよう。

さて、この敦賀平野に所在する坂ノ下遺跡群の立地を見れば、大略的には、筥ノ川扇状地の北東端部、木ノ芽断層により形成された断層崖下の標高約12～16mの箇所に立地する遺跡と、断層崖上の標高約25～70mに立地する遺跡からなる遺跡群とすることができる。また、上述のように遺跡の北方には、三角州低湿地および木ノ芽川扇状地との縫合部に生じた遅堆積の低湿が存在し

ており、水田としての利用が推測される。さらに、遺跡周辺の地形を見れば、本遺跡の立地する
 笹ノ川扇状地上は南西から北東に向かって緩く傾斜を見せている。(工藤)

第2節 歴史的環境

坂ノ下遺跡群の位置する敦賀市では、近年までに少なくない数の遺跡が発見されている。以下、
 この地域に所在する主な遺跡について順次記述する。ただし、なお遡る時期の遺跡や、あるいは
 各時代を通していえることではあるが、集落跡の確認数ははなはだ少ない。そこで、そうした
 欠を補うため、一部の単独遺物発見地についても言及することとした。

まず石器時代について述べると、遺憾ながら未だ不明な部分が多い。現在判明している例はい
 ずれも縄文時代以降のものであって、旧石器時代の例は存在しない。そして、縄文時代の例につ
 いても、明確に遺跡と断定しうる例は存在せず、出土遺物もきわめて断片的なものに過ぎない。
 参考までに、縄文時代遺物の出土地名を列挙すれば、白木（土器片）、常宮の登山口（磨製石斧、
 第5図E）、立洞2号墳（石匙、同図18）、山の上1号墳（中期土器片、磨製石斧、同図17）、吉河遺跡
 （後期土器片、同図21）である。

次に、弥生時代の遺跡も未だ確認数は少ない。

そのうち松島遺跡（同図47）は、既述の3列の浜堤のうち最も南部に位置する浜堤上に所在し、
 早く中期の土器片若干が採集されている。

また、中遺跡（同図14）は、中集落西方の木ノ芽川扇状地上に位置する。昭和51・52（1976・
 77）年に、県教委が北陸自動車道・敦賀バイパス建設に先立って緊急発掘調査を実施した。その
 結果、検出遺構は溝など比較的少数に止まったが、後期の弥生土器など多量の品が出土している。

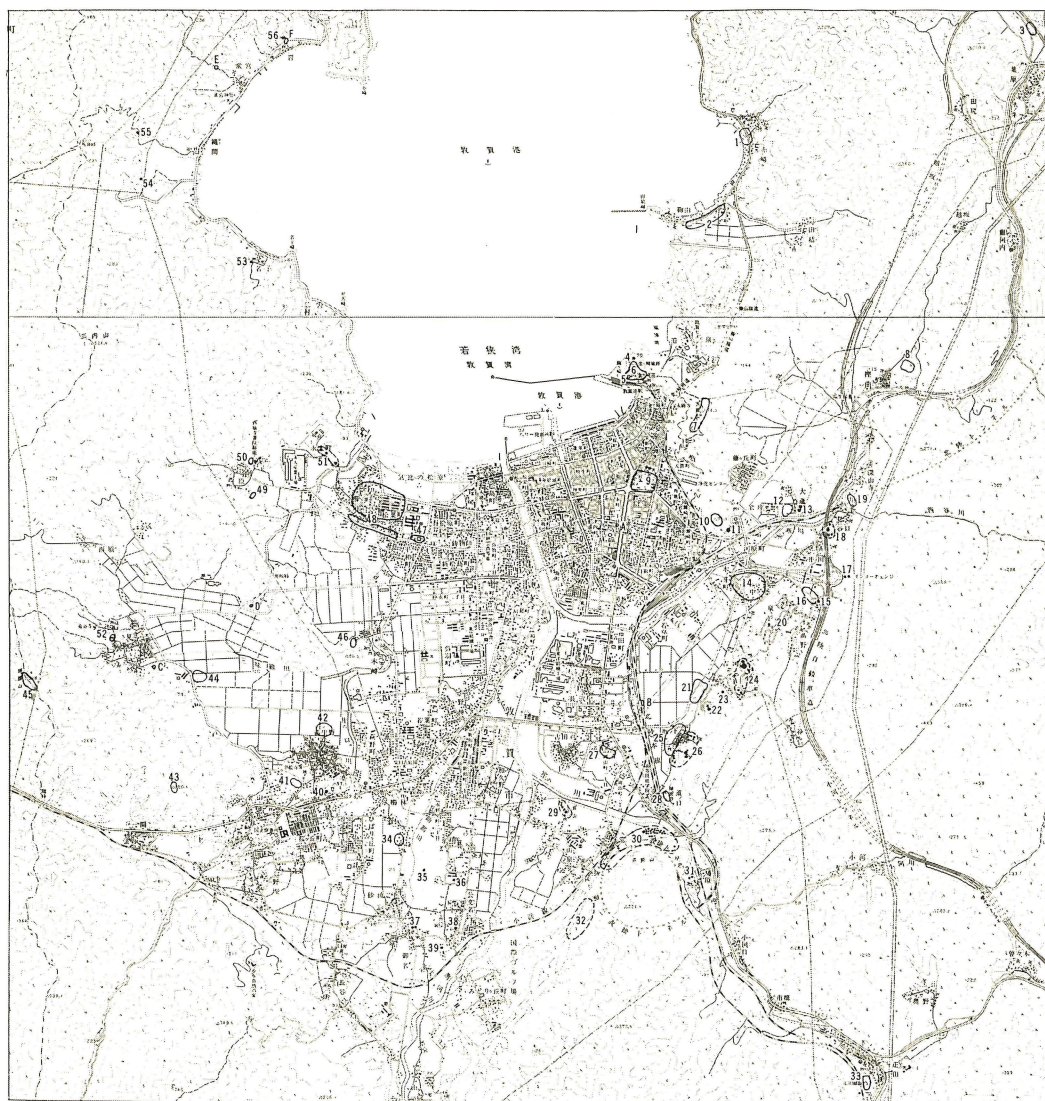
さらに、吉河遺跡は、吉河集落西方の笹ノ川扇状地上に位置する。昭和56（1981）年から同60
 （1985）年にかけて福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下「県埋文」と略記する）が、敦賀
 バイパス建設に先立って緊急発掘調査を実施した。その結果、中期から後期にかけての堅穴住居6
 棟、方形周溝墓25基のほか、当時の集落内道路など、ムラの過半が検出され、土器・石器など多
 量の遺物が出土している。

そのほか、大蔵遺跡（同図12）、筋生野遺跡（同図42）などでも、若干の遺物が採集されている。
 また、遺物の単独出土ではあるが、馬坂（同図D）で中期の壺1個が、長沢（同図B）で終末期の甕
 片など数個が採集されている。

続く古墳時代の遺跡のうちでは、集落の確認数は少ない。上述の中遺跡で、昭和61（1986）年
 に市教委の緊急発掘調査によって中・後期の土師器、須恵器が、吉河遺跡で前期の土師器と後期
 の須恵器が、志比前神社遺跡（同図28）で中期の土師器が、それぞれ若干ずつ出土しているに止
 まる。また、遺跡の性格は判明していないが、沓見南方の丘陵上（同図C）で中期の須恵器1個が、
 沓丸山古墳の南東麓（同図F）で後期の須恵器1個（第6図1）が採集されている。

ところが、古墳については、顕著な存在であるため、他の時代と比べてきわめて確認数が多い。

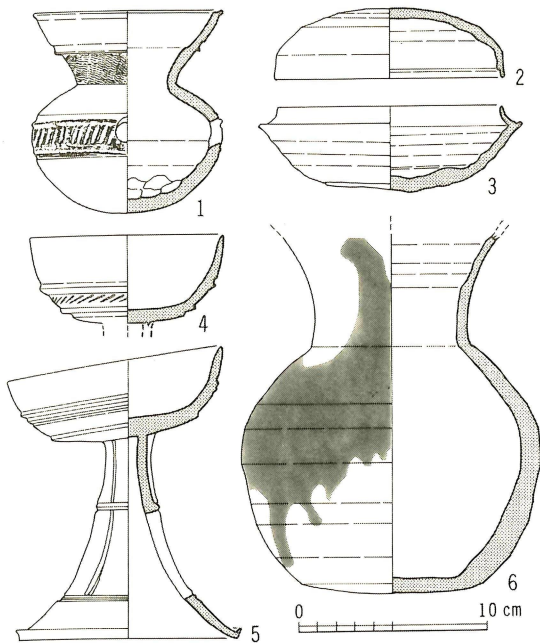
早く『敦賀市通史』に、石井左近氏による調査成果が報告されており、その後の発掘調査例も



第4図 坂ノ下遺跡群の位置と周辺の遺跡分布図（縮尺1/75,000）

第1表 坂ノ下遺跡群周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	赤崎遺跡	14	中遺跡	27	岡山遺跡	40	秋葉山古墳
2	鞠山遺跡	15	桃谷長者古墳	28	志比前神社遺跡	41	沢遺跡
3	葉原古遺跡群	16	高野遺跡	29	宮山古墳群	42	筋生野遺跡
4	金ヶ崎古墳	17	山の上1・2号墳	30	衣掛山古墳群	43	金山城跡
5	金ヶ崎経塚	18	立洞古墳群	31	鳩原1・2号墳	44	石ヶ町遺跡
6	金ヶ崎城跡	19	深山寺経塚群	32	山泉古墳群	45	旗護山城跡
7	手筒山城跡	20	中村山1・2号墳	33	疋田城跡	46	木崎遺跡
8	堂山磐跡	21	吉河遺跡	34	櫛林遺跡	47	松島遺跡
9	気比神宮境内遺跡	22	小谷ヶ洞1・2号墳	35	狐塚古墳	48	櫛川遺跡
10	舞崎遺跡	23	吉河古墳	36	粟野南小学校古墳	49	善衆衣谷横穴群
11	前山古墳	24	向出山古墳群	37	黒河1・2号墳	50	妙華谷横穴群
12	大蔵遺跡	25	坂ノ下遺跡	38	高土居古墳	51	穴地蔵古墳群
13	大塚1・2号墳	26	明神山古墳群	39	天満神社古墳	52	杵見横穴群
						記号	地点名
						A	本町
						B	長沢
						C	杵見
						D	馬坂
						E	常宮
						F	杵丸山古墳南東麓



第5図 敦賀市出土土器実測図（縮尺1/4）

ち、立洞2号墳は、昭和51（1976）年に、県教委が北陸自動車道建設に先立って緊急発掘調査を実施した。墳丘は全長約25mを測り、二段築成で葺石をそなえ、かつ北面するきわめて短い前方部を有する。割竹形木棺から、素文鏡1面、石釧3個などが出土している。本古墳は前期古墳である。

山の上1号墳は、井川集落東方の丘陵先端部に位置する。県教委が、立洞2号墳と並行して緊急発掘調査を実施した。径約13.5mを測る円墳で、横穴式石室から鉄刀2口、須恵器10個などが出土している。本古墳は後期古墳である。

向出山古墳群（同図24）は、吉河集落東方の丘陵頂部ならびに山麓部に分布する。本古墳群は、造り出し付円墳の1号墳と円墳の2～4号墳からなる。昭和29・42（1954・67）年に、石井氏らが向出山1・3・4号墳の発掘調査を、同43（1968）年に森川昌和氏が向出山1号墳の実測を、同58（1983）年に市教委が土地造成に先立って向出山2号墳の緊急発掘を、さらに、同59・60（1984・85）年に県埋文が、埋め戻し保存にそなえて、向出山1・3号墳の石室の実測を、それぞれ行っている。

丘陵頂部に位置する向出山1号墳は、径約60mを測る。墳丘は、二段築成で葺石をそなえ、平野に面して南北長約18m、東西長約12mの方形の造り出しを有する。埋葬施設は東西に並列する横穴式石室各1基である。東方の1号石室から、仿製四神四獣鏡・不明鏡各1面、鉄地金銅装眉庇付冑1鉢、同頸甲1具、挂甲1領など多数の副葬品が出土している。西方の2号石室から、仿製四神四獣鏡1面、横矧板鋌留衝角付冑1鉢、頸甲1具、三角板鋌留短甲1領などが出土している。そのほか、墳頂部から須恵器16個などが出土している。本古墳は中期古墳である。

北接する向出山2号墳は、径約16mを測る円墳である。墳丘には葺石・埴輪を兼備しており、敦

多い。県埋文・市教委による、分布調査や発掘によって昨年までに確認しえた市内の総基数は108基余りを数える。以下、発掘が実施された古墳を主に紹介し、未調査の古墳に関しても一部の主要例については説明する。

金ヶ崎古墳（第5図4）は、敦賀湾に突出する通称金ヶ崎の丘陵先端部に位置する。本古墳は、径約19mを測る円墳である。明治42（1909）年に竪穴式石室が発見され、珠文鏡1面を初めとする副葬品が出土している。戦災を被ったため、珠文鏡以外の出土品が現存せず、詳細な内容は判然としないが、中期古墳であろう。

立洞古墳群は、井川集落北方の、木ノ芽川がまさに敦賀平野に流れ出た南岸の丘陵先端部に位置する。本古墳群は、帆立貝形古墳の2号墳と円墳の1・3・4号墳からなる。そのう

賀地域では類例が少ない古墳である。割竹形木棺の内外から、竪櫛43個、滑石小玉約240個、盾1張などのほか、須恵器3個が出土している。本古墳も中期古墳である。

山麓部に位置する向出山3号墳は、径約13mを測る円墳である。横穴式石室から、耳環3個、轡2組、須恵器34個などが出土している。北接する向出山4号墳は、径約7mを測る円墳である。土砂の堆積で詳細は不明であるが、横穴式石室から耳環1個、須恵器4個などが出土している。この2基とも後期古墳である。

小谷ケ洞1・2号墳（同図24）は、吉河集落南方の丘陵端部に位置する。昭和50（1975）年に、市教委が福井県原子力センター建設に先立って緊急発掘調査を実施した。小谷ケ洞1号墳、は一辺約20mを測る方墳である。埋葬施設は東西に並列する木棺各1基で、東方の割竹形木棺（第1号主体）から鉈1本が、西方の形態不詳の木棺（第2号主体）から鉄剣1口、鉈1本が出土している。また、小谷ケ洞2号墳は径約25mを測る円墳である。割竹形木棺から乳文鏡1面などのほか、墳頂部から土師器7個余りが出土している。この2基はともに前期古墳である。

衣掛山古墳群（同図32）は、笙ノ川南岸の山麓部に分布する。昭和62（1987）年、市教委が圃場整備事業に先立って緊急発掘調査を実施し、径約5～26mの円墳約40基からなることが判明した。群内の大部分は横穴式石室をもち、馬具・須恵器などが出土している。そのほか製塩土器の出土もあり、注目に値する。本古墳群は後期群集墳である。

また、敦賀平野北西部の山麓部には、穴地藏古墳群（同図53）が位置する。本古墳群は3基の小円墳からなる。そのうち穴地藏1号墳は径約11mを測り、石棚を付設した横穴式石室をもつ。他の2基とともに後期古墳である。

さらに、敦賀半島の縄間には2基の古墳が分布する。そのうち尾尻1号墳（同図56）は丘陵上に位置し、昭和59（1984）年、市教委が圃場整備事業に先立って緊急発掘調査を実施した。墳丘は既に破壊されており、副葬品も検出されなかったが、横穴式石室をもつ。後期古墳である。

奈良・平安時代の遺跡としては、櫛川遺跡（同図50）、葉原古窯跡群（同図5）、深山寺経塚群（同図21）、高野遺跡（同図18）などや、気比神宮境内遺跡（同図11）などの存在が確認されている。

櫛川遺跡は、松原浜堤の西端に位置する。昭和54（1979）年、渤海使に係わる松原客院比定地として、県教委が発掘調査を実施した。客院に関連するとおぼしき遺構は発見できず、かわりに製塩炉が検出されたのみである。だが、小型儀鏡1面、銅銭8枚、銅鈴1個と須恵器など多彩な遺物が出土している。製塩炉は古墳時代後期に遡るが、平安時代前期を中心とする遺跡である。

葉原古窯跡群は、葉原集落北方の南山麓に位置する。昭和55（1980）年、市教委が圃場整備事業に先立って3基の窯跡の灰原を試掘調査した。坏・皿・蓋・甕など多数の平安時代中期の須恵器が出土しており、中でも、風字硯は注目すべき存在である。

深山寺経塚群は、深山寺集落に西接する丘陵上に位置する。本経塚群は20余基からなるという。早くに経巻19巻、経筒2筒、銅鏡2面などが出土している。昭和57（1982）年、市教委が宅地造成に先立って深山寺1～7号経塚の緊急発掘調査を実施した。その結果、深山寺1号経塚からは、銅鏡11面、金銅鈴1個などが、同3号経塚からは銅鏡14面などが、その他の経塚からも蔵骨器などが、

それぞれ出土している。本経塚群は、平安時代末期に造営を開始し、室町時代まで継続して営まれたものと思える。

気比神宮境内遺跡は、敦賀平野北東部の砂丘上に位置する。昭和63（1988）年に礎石や古瓦が採集されており、神宮寺跡かと目されている。

なお、単独の遺物出土地であるが、本町（同図A）から奈良時代の須恵器1個が出土している。

鎌倉・室町時代の主たる遺跡には、城砦跡の確認例が多い。主なもののみあげれば、南北朝・室町時代の例として、天筒山の北西部に位置する金ヶ崎城跡（同図8）、室町時代の例として疋田南方の段丘上に位置する疋壇城跡（同図35）、滋賀県境の柳ヶ瀬山頂部に位置する玄蕃尾城跡などがある。

なお、必ずしもこれまで述べてきたような主要な遺跡とはいいいがたいのであるが、本報告の丑寅山遺跡と関連するとみなせるので言及しておけば、昭和60年、明神山の西斜面に位置する4箇所平坦地のうち1箇所（第2図参照）を、市教委が宅地造成に伴い緊急発掘を実施した。その結果、調査箇所の中央部で南北に並ぶ柱穴3個を検出した。ただ、出土品にごくわずかな江戸時代の遺物があるが、余りにも遺物量が僅少なため、構築ならびに営統時期の確定は困難といわざるをえない。

以上が、敦賀市域に所在する主要遺跡ならびに主要な調査例である。平野部における遺跡の分布に端的に現れていることであるが、これらの遺跡のうち大部分は、井川から山泉にかけての東部山麓地帯に集中している。とりわけ、古代の首長層の動向が端的に現れているといえる主要古墳の分布はいずれも東部山麓地帯である。それに比べて、南部では黒河川の扇状地が発達している。前代の遺跡は確認しえず、古墳時代も後期に至ってようやく狐塚古墳（第5図37）、栗野南小学校古墳（同図38）、黒河1・2号墳（同図39）、天満神社古墳（同図41）など、若干の古墳が出現していることが注目する（第6図2～6参照）。そして西部では、沓見・原などの周辺部に低湿地の存在が顕著である。

すなわち、古代の敦賀地域に関してきわめて大局的に推断すれば、東部は比較的安定した自然的環境にあって、より早くから開墾されたのに対して、南部では河川の氾濫や土砂の堆積のため、西部では低湿地の存在のため遅くまで耕地化が困難であった、感がある。そして、詳しい言及は省略するが、そのような傾向は中世においても多かれ少なかれ存在したといっても過言ではないであろう。

このように、敦賀でも先進地帯であり、かつ、近江から越前中央部にぬける木ノ芽道が通過する東部山麓の中央部に所在するのが、まさに今回調査の対象とした坂ノ下遺跡群（第5図27・28）である。（中司）

注① 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第14集、1980年。

② 浜堤は、風成砂により形成された砂丘と異なり、砂が磯浪の作用で打ち上げられ形成されたものであり、富山県放生津砂丘、石川県羽咋砂丘を類例に挙げうる。

③ 森川昌和「白木浦」（『福井県の地名』1981年）。

- ④ 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第13集、1978年。
- ⑤ 注④に同じ。
- ⑥ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡発掘調査概報』1986年。
- ⑦ 広島一良「松原遺跡」(『福井県における弥生式土器集成』福井考古学研究会、1970年)。なお、本文献では松原遺跡と称されているが、この松原地区には多くの遺跡が所在するので、無用の混乱を避けるため、改称する。
- ⑧ 注①に同じ。
- ⑨ 注⑥に同じ。
- ⑩ 前田 優氏の教示による。
- ⑪ 石井左近氏の教示による。
- ⑫ 山本昭治氏の教示による。
- ⑬ 池田雄二氏の教示による。
- ⑭ 石井左近『敦賀市通史』1956年。
- ⑮ 梅原末治「続越前敦賀郡の遺物と遺跡」(『考古学雑誌』第7巻第1号、)
- ⑯ 注④に同じ。
- ⑰ 注④に同じ。
- ⑱ 石井左近「向出山古墳出土品」(『敦賀市文化財』第2集、1960年)。
- ⑲ 森川昌和「向出山古墳をめぐる」(『別冊 氣比史学』第2号、1981年)。
- ⑳ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡調査ニュース』4、1983年。
- ㉑ 本古墳の出土品については注⑱文献で報告されているが、一般に異説が多いのが実状である。そこで、山口 充と中司が改めて整理を行い、注④文献で報告した。ただし、1号石室出土の金銅装眉庇付冑は復原品によって2鉢と記したが、うち1鉢は問題を残すので除外する。なお、整理作業の実施にあたっては石井左近氏のご配慮と早稲田大学考古学研究会の学生諸氏の協力を得た。
- ㉒ 注⑳に同じ。
- ㉓ 注④に同じ。
- ㉔ 注④に同じ。
- ㉕ 森川昌和「敦賀の開発と発展」(『敦賀市史』通史編上巻、1985年)。
- ㉖ 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群』1988年。なお、本古墳群の総基数については、発掘調査を経たもの以外の周辺に分布する古墳を含めた数である。
- ㉗ 斎藤 優「穴地藏古墳」(『文化財調査報告』第27集、1979年)。
- ㉘ 池田雄二氏の教示による。
- ㉙ 一般にはやはり松原遺跡と称されている。注⑦と同様な理由でここでは改称する。調査結果については山口 充氏の教示による。
- ㉚ 京都大学文学部『京都大学文学部博物館 考古学資料目録』第2部、日本歴史時代、1968年。
- ㉛ 実測にあたっては、石井左近氏のご配慮を得た。
- ㉜ 前田 優「深山寺経塚群」(『昭和57年発掘調査報告会資料』福井考古学会・若狭考古学研究会、1983年)。
- ㉝ 久保智康氏の教示による。

- ④ 福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第13集、1978年。
- ⑤ 注④に同じ。
- ⑥ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡発掘調査概報』1986年。
- ⑦ 広島一良「松原遺跡」(『福井県における弥生式土器集成』福井考古学研究会、1970年)。なお、本文献では松原遺跡と称されているが、この松原地区には多くの遺跡が所在するので、無用の混乱を避けるため、改称する。
- ⑧ 注①に同じ。
- ⑨ 注⑥に同じ。
- ⑩ 前田 優氏の教示による。
- ⑪ 石井左近氏の教示による。
- ⑫ 山本昭治氏の教示による。
- ⑬ 池田雄二氏の教示による。
- ⑭ 石井左近『敦賀市通史』1956年。
- ⑮ 梅原末治「続越前敦賀郡の遺物と遺跡」(『考古学雑誌』第7巻第1号、)
- ⑯ 注④に同じ。
- ⑰ 注④に同じ。
- ⑱ 石井左近「向出山古墳出土品」(『敦賀市文化財』第2集、1960年)。
- ⑲ 森川昌和「向出山古墳をめぐって」(『別冊 氣比史学』第2号、1981年)。
- ⑳ 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡調査ニュース』4、1983年。
- ㉑ 本古墳の出土品については注⑱文献で報告されているが、一般に異説が多いのが実状である。そこで、山口 充と中司が改めて整理を行い、注④文献で報告した。ただし、1号石室出土の金銅装眉庇付冑は復原品によって2鉢と記したが、うち1鉢は問題を残すので除外する。なお、整理作業の実施にあたっては石井左近氏のご配慮と早稲田大学考古学研究会の学生諸氏の協力を得た。
- ㉒ 注⑳に同じ。
- ㉓ 注④に同じ。
- ㉔ 注④に同じ。
- ㉕ 森川昌和「敦賀の開発と発展」(『敦賀市史』通史編上巻、1985年)。
- ㉖ 敦賀市教育委員会『衣掛山古墳群』1988年。なお、本古墳群の総基数については、発掘調査を経たもの以外の周辺に分布する古墳を含めた数である。
- ㉗ 斎藤 優「穴地藏古墳」(『文化財調査報告』第27集、1979年)。
- ㉘ 池田雄二氏の教示による。
- ㉙ 一般にはやはり松原遺跡と称されている。注⑦と同様な理由でここでは改称する。調査結果については山口 充氏の教示による。
- ㉚ 京都大学文学部『京都大学文学部博物館 考古学資料目録』第2部、日本歴史時代、1968年。
- ㉛ 実測にあたっては、石井左近氏のご配慮を得た。
- ㉜ 前田 優「深山寺経塚群」(『昭和57年発掘調査報告会資料』福井考古学会・若狭考古学研究会、1983年)。
- ㉝ 久保智康氏の教示による。

③④ 敦賀市教育委員会『図録 敦賀の文化財』1988年。

③⑤ 注③④に同じ。

③⑥ 福井県教育委員会『文化財調査報告』第28集、1987年。

③⑦ 実測にあたっては、敦賀市立歴史民俗資料館や前田 優・池田雄二（以上、敦賀市教育委員会）、荒川 史・木原 光（以上、富山大学人文学部学生）などの各氏のご協力を得た。

③⑧ 原周辺部については、その一部が貯木用の池として現在用いられており、存在が確かである。また、沓見周辺部については、かつて圃場整備事業に伴い、排水路が掘削されたさい、広範囲に水田の耕作土下に泥炭層が存在することを確認している。

第2表 敦賀市内出土土器観察表

器形	土器番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
甕	1	口径 10.1 器高 10.8	・口縁部は外面に稜を形作って内湾気味に外上方に立ち上がり、端部が内傾面をなす。 ・頸部外面に波状文を巡らす。 ・体部外面は2条の稜線で肩部・胴部・底部に三分割し、胴部に工具による連続斜行刺突文を巡らす。	・内外面とも横ナデ調整する。 ・底部内面には当具痕が残る。	・砂粒をほとんど含まない。 ・焼成良好	灰色	・口頸部の過半を欠失する。 ・沓丸山古墳山麓出土。 ・口頸部内面と底部内面に自然釉がかかる。
坏蓋	2	口径 12.2 器高 3.8	・天井部と口縁部とを分ける稜は痕跡となる。 ・口縁端部は内傾面をなす。	・内面と口縁部外面は横ナデ調整する。 ・天井部外面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	暗灰色	・ほぼ完形品。 ・天満神社古墳出土。
坏	3	口径 12.0 器高 4.6	・口縁端部は丸くおさめる。 ・底部外面は平らである。	・底部外面を除く内外面は横ナデ調整する。 ・底部外面は不調整である。	・砂粒をごくわずかに含む。 ・焼成良好	暗灰色	・ほぼ完形品。 ・天満神社古墳出土。 ・重ね焼きのため、受部に杯口縁端部の一部が融着する。
無蓋高坏	4	口径 10.3 器高 (4.6)	・坏部外面は2条の稜線で口縁部・体部・底部に三分割し、体部に工具による連続斜行文を巡らす。	・内外面とも横ナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	黒灰色	・脚部を欠失する。 ・栗野南小学校古墳出土。
高坏	5	口径 11.6 底径 11.7 器高 15.5	・坏部外面は上から各2条の稜線・1条の稜線で口縁部・体部・底部に三分割する。 ・脚部外面も2条の稜線で上段・中段・下段に三分割し、上・中段には長方形の三方透かしの孔をあけている。	・内外面とも横ナデ調整する。	・砂粒をほとんど含まない。 ・焼成良好	黒灰色	・ほぼ完形品。 ・栗野南小学校古墳出土。
長頸壺	6	口径 (11.5) 胴径 14.8 器高 (19.0)	・口縁部は外湾しながら外上方に立ち上がる。 ・腰部と底部の境の外面には明確な稜を形作る。	・肩部より上の外面と内面は横ナデ調整する。 ・胴部・底部外面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	黒灰色	・口縁端部を欠失する。 ・栗野小学校古墳出土。 ・頸部～胴部外面に濃緑色の自然釉が厚くかかる。

第4章 坂ノ下遺跡の調査

第1節 遺 跡

今回の調査地は、建設省の工事箇所で説明すれば、金山バイパス坂ノ下高架橋（坂ノ下1工区）部分に相当する。地表面における標高は、第1～第3トレンチが12.4m、第4トレンチが12.7m、第5トレンチが13.1m、をそれぞれ測る。

第1トレンチは、農道の交差に沿って東西・南北方向にL字形に設けた。その規模は、南北長25m、東西長4.5m、幅2mを測る。耕作土下で黒褐色の遺物包含層の存在を確認したが、遺構は全く検出しえなかった。

第2トレンチは、第1トレンチの南東方約20mの箇所に南北方向に設定し、長さ10m、幅1.5mを測る。同様に、遺物包含層のみで遺構は検出しえなかった。

第3トレンチは、第1トレンチの東方約20mの箇所に南北方向に設定し、長さ5m、幅1.5mを測る。同様に、遺物包含層のみで遺構は検出しえなかった。

第4トレンチは、第1トレンチの南西方約30mの箇所に東西方向に設定し、長さ10m、幅2mを測る。同様に、遺物包含層のみで遺構は検出しえなかった。

第5トレンチは、第1トレンチの南方20m余に東西方向に設定し、長さ10m、幅2mを測る。同様に、遺物包含層のみで遺構は検出しえなかった。（中司）

第2節 遺 物

出土遺物は、ポリ袋10余袋とごく少量である。その大部分を弥生土器が占めているが、そのほかごく少数の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・陶器・鉄器なども混在する。

このように出土遺物の量が少なく、しかも必ずしも器形を明示しうる品は多くないので、発掘による出土品のみではなく、調査箇所周辺部や常宮神社周辺部における採集品も、当遺跡の一端を知る参考品として等閑視しがたいと考えるので、それらも含めて報告する。以下、各出土箇所ごとに記述するが、鉄器を除いた土器の個別の詳細については、観察表を参照されたい。

第1トレンチ出土遺物（図版第三、第7図1～17、第8図39～42）

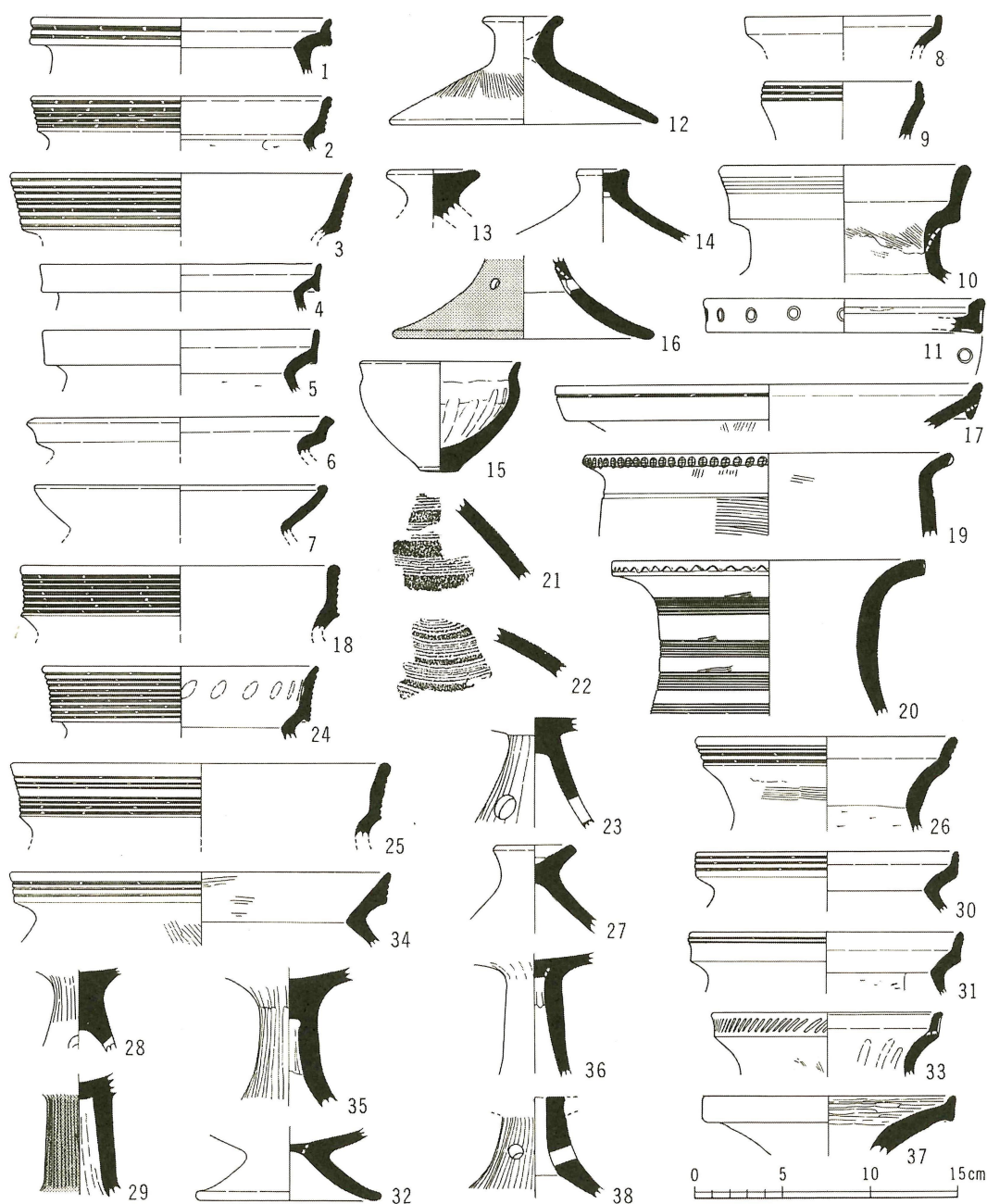
弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器がある。弥生土器・土師器には、甕・壺・蓋・碗・有孔鉢・高坏・器台などがある。そのうち二重口縁を有する甕には、口縁部外面に1～9条の擬凹線文を巡らす例（1～3）と無文の例（4～6）とがある。前者と後者は同数であるが、前者における擬凹線文の数は5条が最多を占める。7は、口縁部が内湾しながら外上方に立ち上がり、内端部が肥厚する甕である。壺はいずれも二重口縁を有するが、やはり口縁部外面に文様を巡らす例（9～11）と無文の例（8）とがある。前者のうち9・10は擬凹線文を巡らす。また、11は円形刺突文（竹管

文)を口縁部外面だけではなく、下面にも同様な間隔で粗く巡らしている。器台(17)は、図示以外の例も同様な器形をなし、口縁部外面に1~3条の擬凹線文を巡らす。そのほか、律令期の土師器小皿(39・40)、須恵器碗(41)・灰釉陶器碗(42)などが混在する。

第2トレンチ出土遺物(図版第三、第7図18~23)

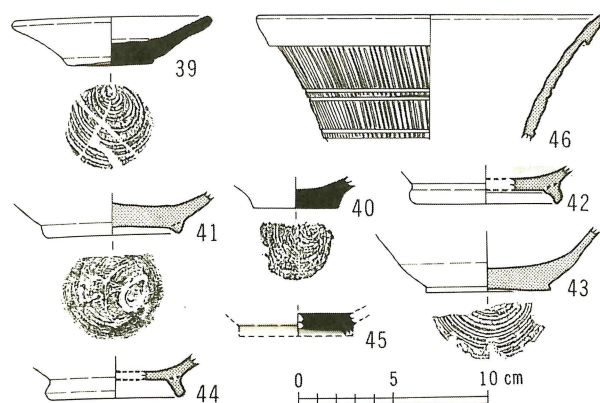


第6図 坂ノ下遺跡群調査区位置図(縮尺1/1,800)



第7図 坂ノ下遺跡出土土器実測図1 (縮尺1/4)

弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器がある。弥生土器・土師器には、甕・壺・有孔鉢・高坏・器台などがある。そのうち二重口縁を有する甕は、口縁部外面に2～3条の擬凹線文を巡らす例が大部分であるが、1例のみ7条の擬凹線文を巡らす品（18）がある。屈曲部外面に突出



第8図 坂ノ下遺跡出土土器実測図2 (縮尺1/4)

のうち二重口縁を有する甕は、口縁部外面に7～9条の擬凹線文を巡らす例が大部分である。やはり、1例のみ屈曲部外面に突出する稜を有する品(25)がある。また、「く」の字状に外反し、外端部に狭い垂直面を有する甕も1例ある。高坏脚部(29)は、外面に赤色顔料を塗彩する。そのほか、灰釉陶器碗・青磁碗・陶器鉢が混在する。

第4トレンチ出土遺物(図版第三、第8図30・31、第9図43・44)

弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器がある。弥生土器・土師器には、甕・壺・高坏などがある。そのうち二重口縁を有する甕は、口縁部外面に2～3条の擬凹線文を巡らす。そのほか、須恵器碗(43)・灰釉陶器碗(44)が混在する。

第5トレンチ出土遺物(図版第三、第8図32、第9図45)

弥生土器・土師器・緑釉土器・鉄器がある。弥生土器・土師器には、甕・壺・台付鉢などがある。緑釉土器には碗(45)がある。鉄器は1個ある。両端部を欠失しており、現存長42.2mmを測る。錆と土との固着のため確言しがたいが、小型の刀子状の品である。身部は断面が長三角形をなし、現存長22.5mm、幅10.4mmを測り、刀子とすれば棟厚3mmを測る。一方、茎部は現存長19.7mm、端部幅7.6mm、厚さ2.5mmを測る。現存の重さは5.08gを測る。

周辺地区採集遺物(図版第三、第8図33～38、第9図46)

弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器がある。弥生土器・土師器には、甕・壺・蓋・高坏・器台などがある。そのうち甕は二重口縁を有する品で、口縁部外面に擬凹線文を巡らす例(34)や斜行する連続刺突文を巡らす例(33)や無文の例がある。そのほか、律令期の土師器小皿・灰釉陶器碗、須恵器の碗・蓋・広口壺(46)・甕、陶器鉢などが混在する。(中司)

第3節 ま と め

1 出土品について

まず出土品から取り上げる。

甕19は、弥生土器の第Ⅰ様式に相当する。ちなみに、敦賀地域における第Ⅰ様式の土器としては初出例である。また、壺（20～22）は第Ⅱ様式に相当する。

土師器の甕（6）は、近江系の品である。県下では、三方郡美浜町久々子口瀬湖遺跡第2号住居出土品に類例があり、庄内式期に相当する。小断片のため図示しえなかったが、第3トレンチ出土品にも、口縁部が「く」の字状に外反するとともに、外端部に幅の狭い垂直面を有するので、庄内式の可能性が強い甕が混在する。なお、甕口縁部（33）や高坏脚部（16・29）は、ともに明るい薄褐色を呈し、坂ノ下遺跡の一般的な土器とは色調を異にしている。とりわけ、（29）は赤色粒を多く含む。これらは、いずれも他の地方の搬入品である可能性が強い。

律令期の土師器小皿（39）は、田嶋編年のV2期に相当する。V（V1～V3）期が10世紀前半から11世紀前後の年代が該当するとされているので、10世紀でも中頃に近い時期を想定しうる。

灰釉陶器には埴（42・44）など7個の破片がある。（42）は黒笹90（K-90）号窯式に相当するので10世紀前半、（44）は折戸53（O-53）号窯式に相当するので10世紀後半に比定しうる。

2 遺跡について

坂ノ下遺跡の所在する当地区は、笹ノ川の分流の東岸に形成された扇状地と、坂ノ下集落東方の谷間から西方に流下する小河川が形成した扇状地とが複合している。そうした地形から見て、古代の集落跡は現集落に重複する形でこの複合扇状地上に位置しているものと想定しうる。調査地だけではなく現集落南端部に所在する常宮神社に南西接する箇所などからも須恵器だけではなく弥生土器片を採集している事実もその想定を補強する。つまり、坂ノ下遺跡は、十九字羽折、二十字下出、二十六字宮ノ前、二十五字宮ノ上の各地籍にまたがり、南北長2～300mにおよぶものと思える。

したがって、今回の発掘調査では、遺構の存在を確認しえなかったのであるが、遺跡の中心部と推定される現集落中央部から標高のより低い調査箇所の字羽折に遺物が流下したのと考えざるをえない。（中司）

注① 入江文敏「口背湖遺跡」（『福井県史』資料編13、1986年）。

② 石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡』Ⅰ、1986年。

③ 植崎彰一「猿投窯の編年について」（『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ、1983年）。

④ 正確を期すならば、水田となっているため分布調査では遺物を採集できなかったが、二十五字宮ノ上に南接する箇所は、三十五字狐塚ときわめて示唆的な字名を有しており、かつ、南方に近在する衣掛山古墳群の発掘調査の結果から鑑みても、かつて明神山古墳群南支群の一部が、西方の山麓平地部にまで広がっていたことを類推させるに十分である。よって、遺跡の範囲はさらに南方に広がっている可能性が大と考えざるをえない。

第3節 まとめ

第3表 坂ノ下遺跡出土土器観察表

器形・土器番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
表	1 口径 17.3 器高 (3.2)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾気味に短く直立する。 ・同外面に2条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面はヘラ削りする。	・砂粒を若干含む。 ・焼成やや不良	茶褐色	・口頸部の1/8遺存。 ・1T出土。
	2 口径 17.3 器高 (3.2)	・口縁部は外面に稜を形作って外上方に立ち上がる。 ・同外面に5～6条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	赤褐色	・口頸部の1/7遺存。 ・1T出土。
	3 口径 19.6 器高 (3.2)	・口縁部は外面に稜を形作って外上方に立ち上がる。 ・同外面に9～10条の擬凹線文を巡らす。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	薄褐色	・口頸部の1/10遺存。 ・1T出土。
	4 口径 16.1 器高 (2.7)	・口縁部は外面に垂下する稜を形作って外湾気味に外上方に短く立ち上がる。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口頸部の1/8遺存。 ・1T出土。
	5 口径 15.8 器高 (3.7)	・口縁部は外面に垂下する稜を形作って外上方に短く立ち上がる。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口頸部の1/12遺存。 ・1T出土。
	6 口径 17.6 器高 (2.2)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾しながら、外上方に短く立ち上がり、端部が外傾面をなす。	・調整は不明である。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	薄褐色	・口頸部の1/12遺存。 ・1T出土。
	7 口径 16.7 器高 (2.8)	・口縁部は内湾しながら外上方へ立ち上がり、内端部が肥厚する端部を丸くおさめる。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	褐色	・口頸部の1/9遺存。 ・1T出土。
壺	8 口径 11.2 器高 (1.9)	・口縁部は外面に稜を形作って外上方に短く立ち上がる。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口頸部の1/9遺存。 ・1T出土。
	9 口径 8.8 器高 (3.4)	・口縁部は外面に稜を形作って内湾気味に短く直立する。 ・同外面に3条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整か。	・砂粒を若干含む。 ・焼成やや不良	褐色	・口頸部の1/11遺存。 ・1T出土。
	10 口径 14.3 器高 (6.7)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾しながら、外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・頸部内面には接合痕と斜めのハケ調整痕が残る。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口頸部の1/3遺存。 ・1T出土。
	11 口径 15.9 器高 (1.9)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾気味に短く直立し、端部が内傾面をなす。 ・同外・下面に連続円形刺突文を巡らす。	・調整は不明である。	・砂粒を若干含む。 ・焼成不良	薄褐色	・口頸部の1/7遺存。 ・1T出土。
蓋	12 上径 4.6 口径 15.4 器高 6.1	・つまみ部は上方にのびて外上方に開く。 ・体部は直線的に外下方に広がる。	・体部外面には縦のハケ調整痕が残る。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	黄褐色	・3/5遺存。 ・1T出土。
	13 上径 5.4 器高 (2.9)	・つまみ部は外上方に長く開く。	・調整は不明である。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	暗褐色	・つまみ部のみ遺存。 ・1T出土。
	14 上径 3.1 器高 (4.2)	・つまみ部は外上方に短く開く。 ・体部は外湾気味にのびる。	・調整は不明である。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	褐色	・口縁部を欠失。 ・1T出土。
椀	15 口径 9.2 器高 6.2	・口縁部は「く」の字状に外反する頸部から外上方に短く立ち上がる。 ・体部最大径は肩部に位置する。 ・丸みのある小さい底部をもつ。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面は縦の指ナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	褐色	・口縁部の一部を欠失。 ・1T出土。
	16 口径 9.2 器高 6.2	・口縁部は「く」の字状に外反する頸部から外上方に短く立ち上がる。 ・体部最大径は肩部に位置する。 ・丸みのある小さい底部をもつ。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面は縦の指ナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	褐色	・口縁部の一部を欠失。 ・1T出土。
器台	17 口径 24.4 器高 (2.6)	・口縁部は外面に垂下する稜を形作って外上方に短く立ち上がる。 ・同外面に1条以上の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・器受部外面には縦のハケ調整痕が残る。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	赤褐色	・器受部の1/11遺存。 ・1T出土。
	18 口径 18.3 器高 (3.6)	・口縁部は外面に稜を形作って直立し、端部を丸くおさめる。 ・同外面に7条の擬凹線文を巡らす。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口縁部の1/10遺存。 ・1T出土。
	19 口径 21.2 器高 (4.7)	・口縁部は外湾しながら外上方に立ち上がる。 ・同端部下部に楕円形の刺突文を巡らす。 ・肩部に1条の横波状線文を巡らす。	・頸部外面は縦のハケ調整後ナデ調整、肩部外面は横のハケ調整する。 ・内面は横のハケ調整後、ナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口・肩部の1/10遺存。 ・2T出土。
壺	20 口径 17.9 器高 (9.0)	・口縁部は直立する頸部からラッパ状に強く開く。 ・同端部に連続三角刺突文を、頸部外面に単帯構成の櫛横平行線文(7～8条)4帯を時計回りに巡らす。	・内面はナデ調整か。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	黄褐色	・口頸部の1/5遺存。 ・2T出土。
	21 器高 (4.7)	・肩部外面に単帯構成の櫛横平行線文(7条)3帯を巡らす。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・5.0×6.1cmの小断片。 ・2T出土。 ・22と同一個体。
	22 器高 (2.8)	・肩部外面に単帯構成の櫛横平行線文(7条)4帯を巡らす。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・5.5×5.0cmの小断片。 ・2T出土。 ・21と同一個体。
高坏	23 器高 (6.2)	・脚筒部は緩やかに広がり、屈曲部に3孔を有する。	・脚筒部外面は縦のヘラ磨きする。	・砂粒をかなり多く含む。 ・焼成良好	薄褐色	・杯底部・脚筒部のみ遺存。
	24 口径 15.9 器高 (4.1)	・口縁部は外面に垂下する稜を形作って外湾しながら外上方に立ち上がる。 ・同外面に7条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・同内面に指頭圧痕が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成やや不良	薄褐色	・口縁部の1/7遺存。 ・3T出土。
表	25 口径 21.7 器高 (4.2)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾しながら外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。 ・同外面に7条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整か。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	暗褐色	・口縁部の1/9遺存。 ・3T出土。
	26 口径 15.0 器高 (5.4)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾しながら外上方に短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。 ・同外面に4条の擬凹線文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・体部内面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶赤褐色	・口縁部の1/3遺存。 ・4T出土。
蓋	27 上径 4.7 器高 (5.1)	・つまみ部は外上方に短く開く。 ・体部は直線的にのびる。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	薄赤褐色	・つまみ部と体部の一部のみ遺存。 ・3T出土。
	28 器高 (4.7)	・脚筒部は緩やかに広がり、屈曲部に4孔を有する。	・脚筒部外面は縦のヘラ磨きする。 ・同内面はナデ調整する。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・杯底部と脚筒部のみ遺存。 ・3T出土。
高坏	29 器高 (7.0)	・脚筒部は直線的に開く脚筒部から屈曲して広がる。	・脚筒部外面は縦のヘラ磨きする。 ・同内面はシボリ目が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	淡褐色	・杯底部と脚筒部のみ遺存。 ・3T出土。 ・外面は赤色顔料で塗彩する。
	30 口径 15.0 器高 (3.4)	・口縁部は外面に稜を形作って短く直立する。 ・同外面に3条の擬凹線文を巡らす。	・頸部外面は横ナデ調整する。 ・内面の調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	赤茶褐色	・口縁部の1/8遺存。 ・4T出土。
表	31 口径 15.7 器高 (3.5)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾しながら外上方に立ち上がる。 ・同外面に2条の擬凹線文を巡らす。	・口頸部外面は横ナデ調整する。 ・体部内面のヘラ削りは逆時計回りである。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	褐色	・口縁部の1/10遺存。 ・4T出土。
	32 底径 10.6 器高 (4.1)	・脚筒部は外湾しながら外下方に広がる。	・調整は不明である。	・砂粒を多く含む。 ・焼成不良	黄褐色	・台部のみ遺存。 ・5T出土。

第4章 坂ノ下遺跡の調査

器形 土器 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
喪	33 口径 13.1 器高 (3.4)	・口縁部は外面に稜を形作って外湾気味に外上方に短く立ち上がる。 ・同外面に連続斜行刺突文を巡らす。	・口縁部内外面は横ナデ調整する。 ・頸部外面には斜めのハケ調整痕が、同内面には縦の指ナデ調整痕が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	薄褐色	・口頸部の1/7遺存。 ・表面採集。
	34 口径 21.7 器高 (4.1)	・口縁部は外面に稜を形作って外上方に短く立ち上がる。 ・同外面に3条の縦凹線文を巡らす。	・肩部外面には縦の、口縁部内面には横のハケ調整痕が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・口頸部の1/12遺存。 ・表面採集。
高 坏	35 器高 (7.9)	・脚筒部は柱状にのびる脚筒部から緩やかに広がる。	・脚筒部外面は縦のへう磨きする。 ・同内面にはシボリ目が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・脚筒部のみ遺存。 ・表面採集。
	36 器高 (7.0)	・脚筒部は柱状にのびる。	・脚筒部外面は縦のへう磨きする。 ・同内面にはシボリ目が残る。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	茶褐色	・脚筒部のみ遺存。 ・表面採集。
壺	37 口径 14.5 底径 (3.4) 器高 (5.7)	・器受部は外湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部外面に稜を形作って短く直立する。 ・脚筒部は緩やかに広がる脚筒部から内面に稜を形作って外下方に広がる。 ・屈曲部に3孔有する。	・器受部外面はへう磨きする (方向不明) ・同外面は横のへう磨きする。 ・脚筒部外面は縦のへう磨きする。 ・同内面はナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	褐色	・器受部の1/8遺存。 ・表面採集。
	38 口径 10.5 底径 4.5 器高 2.6	・口縁部は底部から外湾気味に外上方に立ち上がる。 ・底部は平底を呈する。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切りである。	・砂粒を多く含む。 ・焼成良好	褐色	・口縁部の一部を欠失。 ・1T出土。
小 皿	39 口径 10.5 底径 4.4 器高 (1.7)	・口縁部は底部から外湾気味に外上方に立ち上がる。 ・底部は平底を呈する。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切りである。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	暗褐色	・底部の2/3遺存。 ・1T出土。
	40 口径 7.0 底径 (2.2) 器高 (2.0)	・体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。 ・高台は低い三角高台である。	・内外面とも調整は不明である。 ・底部はへう削り調整後高台接合部をナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	明灰色	・底部の3/4遺存。 ・1T出土。
碗	41 口径 7.4 底径 (2.0) 器高 (2.0)	・高台は低い三角高台である。	・内外面とも回転ナデ調整する。	・砂粒をほとんど含まない。 ・焼成良好	明灰色	・底部の1/5遺存。 ・1T出土。 ・体部内面には薄灰緑色の灰釉がかかる。
	42 口径 6.5 底径 (3.2) 器高 (2.2)	・口縁部は底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。 ・高台は三日月高台で外方に開く。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切り後へう削り調整する。 ・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切り後高台接合部をナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	灰色	・底部の1/2遺存。 ・4T出土。
	43 口径 7.4 底径 (2.2) 器高 (1.1)	・高台は低い三角高台である。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切り後高台接合部をナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	灰白色	・底部の1/5遺存。 ・4T出土。
	44 口径 6.0 底径 (1.1) 器高 (1.1)	・高台は低い三角高台である。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切り後高台接合部をナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	暗緑色	・底部の1/4遺存。 ・5T出土。 ・内外面とも緑釉がかかる。
広 口 壺	46 口径 18.0 器高 (6.5)	・口縁部は外面に垂下する稜を形作り、外上方に立ち上がる。 ・頸部外面は粗い櫛で縦に平行線文を施し、その後2条の横の平行線文を巡らし、上・中・下段に区画する。 ・粘土紐巻き上げの凸凹が残る。	・内外面とも回転ナデ調整する。 ・底部は回転系切り後高台接合部をナデ調整する。	・砂粒を若干含む。 ・焼成良好	黒灰色	・底部の1/7遺存。 ・表面採集。 ・内面は灰緑色の自然釉がかかる。

第5章 明神山古墳群丑寅山支群・丑寅山遺跡の調査

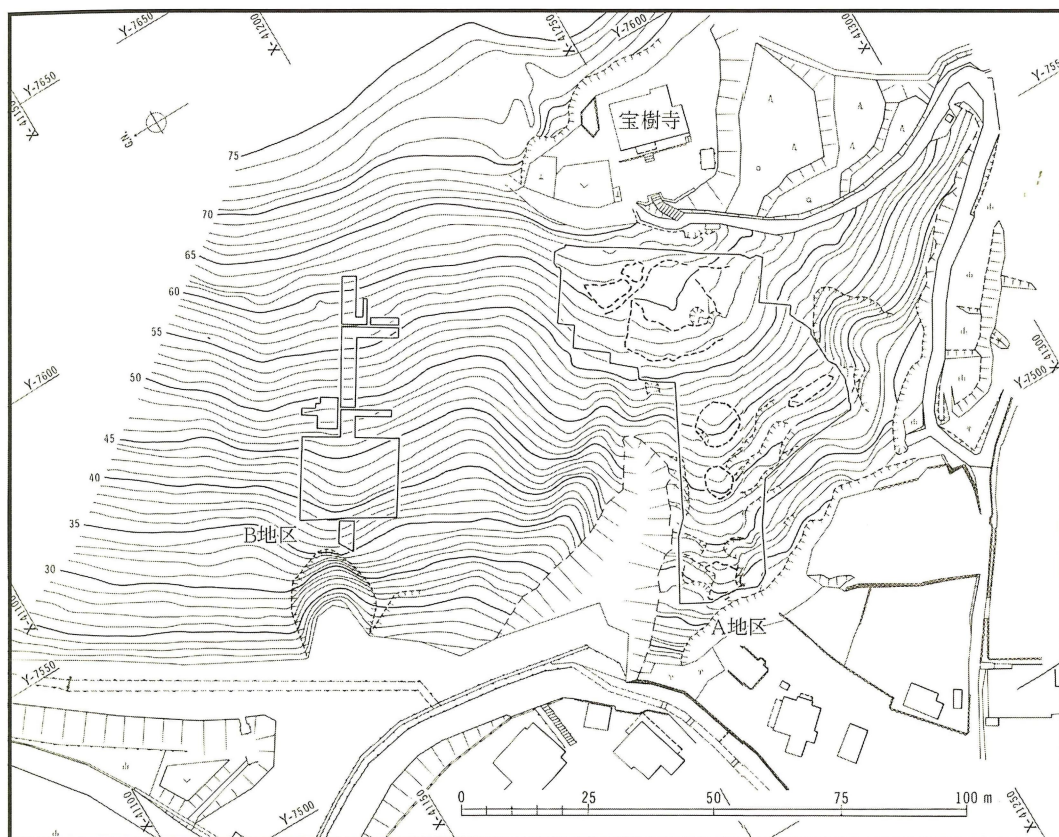
第1節 遺 跡

今回検出した遺構は、古墳時代の古墳7基、土壙墓1基、竪穴式小石室1基などと中世墓群である。しかし、例言に記したように丑寅山遺跡に含まれる中世墓群であるが、その歴史的な経緯から「坂ノ下中世墓群」と別と呼称した。よってここでは明神山古墳群丑寅山支群と丑寅山遺跡についての報告のみとし、坂ノ下中世墓群については丑寅山遺跡とは別にまとめて記述する。

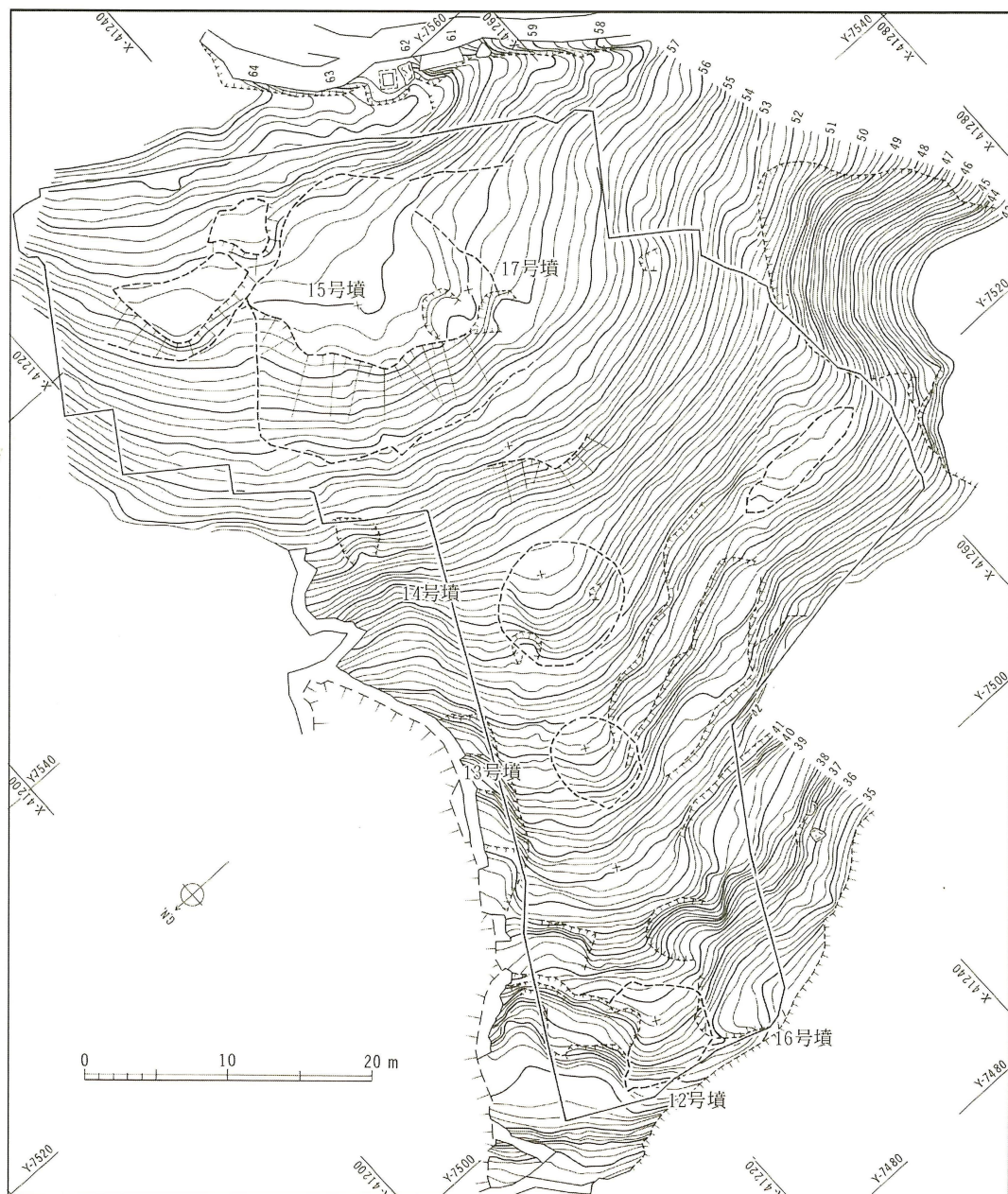
次に、検出遺構を各時代ごとに報告する。ちなみに、説明にあたっては山麓部を西方、山頂部を東方として記述する。

1 古墳時代

古墳時代の主な遺構としては、A地区に明神山12～17号墳と土壙墓、竪穴式小石室が、B地区に明神山18号墳が存在する。ただし、今回の調査の結果、明神山12・13号墳間にはまさに古墳1基が



存在するにふさわしい余地があり、地形の隆起もそれかと思わせる形状であった。そのため、発掘途上以前まではこの箇所を明神山13号墳と仮称していた。また、明神山14号墳の南方10m余にも平坦な箇所があり、これを墳丘の流失が激しい古墳である可能性を考慮して、明神山16号墳と仮称していた。発掘の結果、双方とも古墳に相当する遺構の存在を確認しえず、むしろ逆に別の箇所ですれまで未確認であった古墳の存在が判明した。したがって、本報告では、古墳の号数を





第11図 明神山古墳群丑寅山支群A地区検出遺構実測図（縮尺1/250）

順次繰り上げて整理し、改称後の新名称で呼び分けることとする。今後は、これをもって正式な古墳名としたい。

なお、整理・改称後の古墳名の新旧の対照は、以下のとおりである。

- (旧) 明神山14号墳→(新) 明神山13号墳
 (〳) 〳 15号墳→(〳) 〳 14号墳
 (〳) 〳 17号墳→(〳) 〳 15号墳
 (〳) 〳 18号墳→(〳) 〳 16号墳
 (〳) B地区 1号墳→(〳) 明神山18号墳

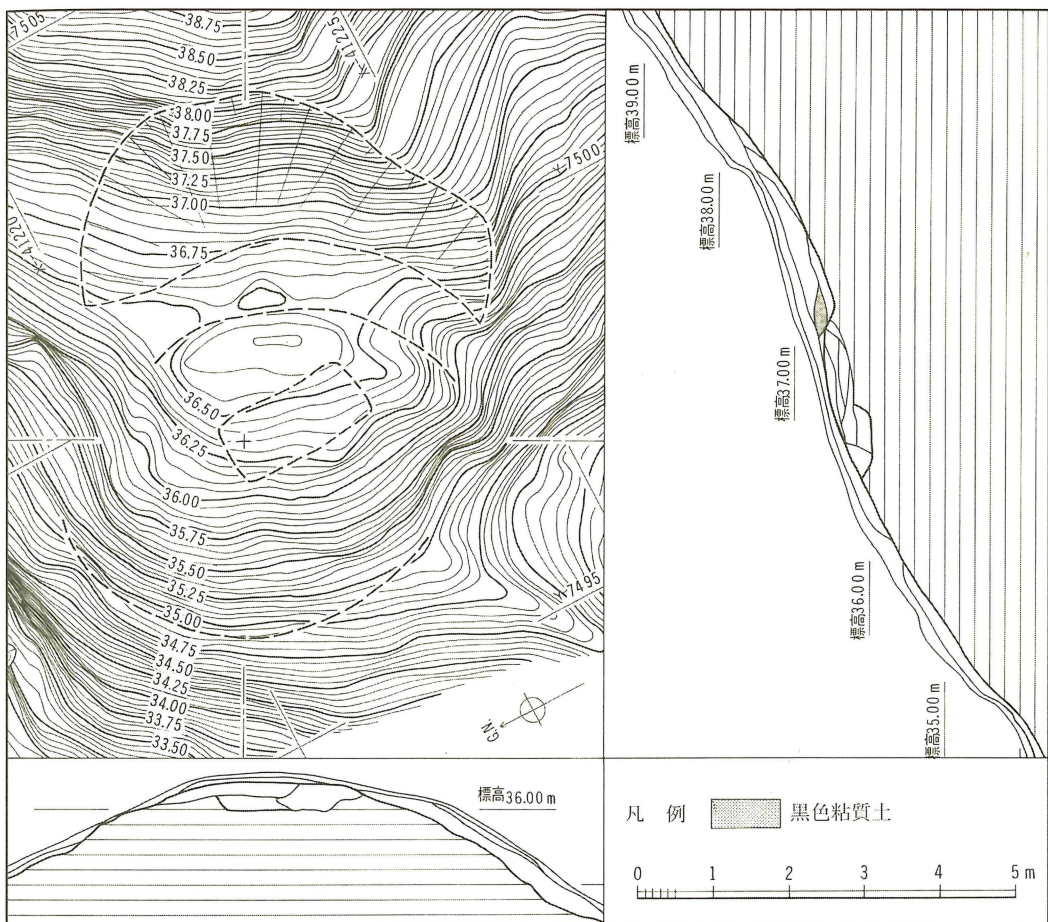
以下、A地区から順次説明する。

A地区

明神山12号墳（図版第六・七、第12・13図）

墳丘

明神山古墳群丑寅山支群の西端部、丘陵稜線の最先端部に所在する円墳である。ちなみに、山



麓部の平地と明神山12号墳の墳丘基底部との比高差は、約16mを測る。

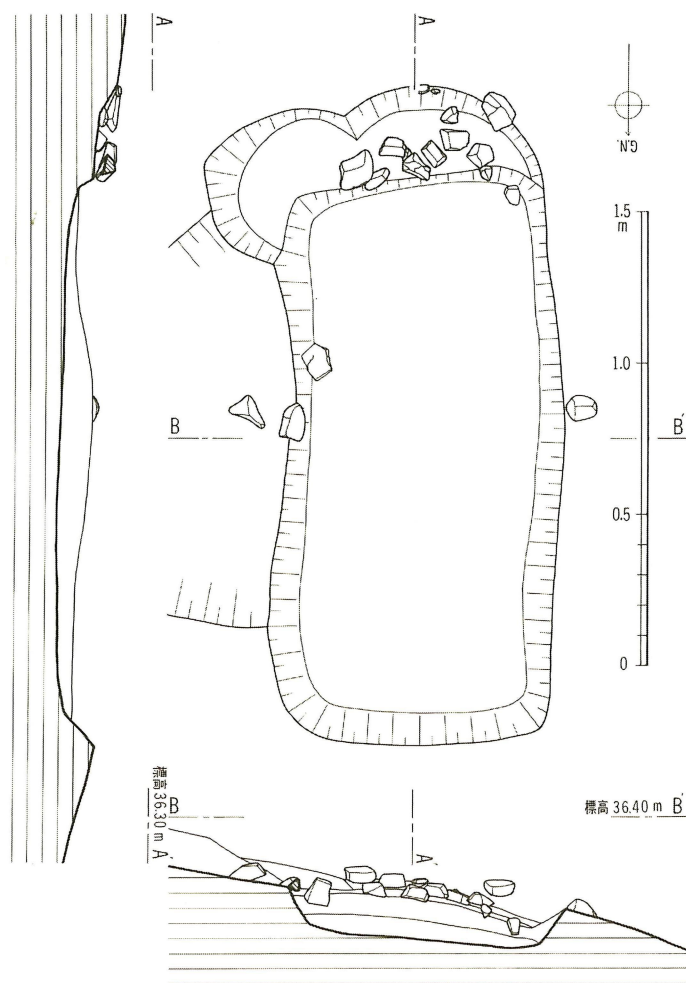
発掘に着手する以前の本古墳は、地表観察では墳丘のより高所には溝を確認しえず、いわば階段状の地形を呈していた。地表面での規模は東西径7.5m、高さ4.1mを測る。墳丘の南・北兩部分は、植林や土取りなどのため平坦にならされるためか、掘削された箇所が混在する。つまり、この古墳は、凹凸の激しい小隆起をなしており、かろうじて古墳かと識別しうる状態であった（第12図）。

発掘による表土・流土除去後の形状も、やはり地表と同様に墳丘の南・北兩端部の崩壊が激しいものであり、その部分では墳丘の基底線は検出しえなかった。

本古墳は、丘陵のより高所を溝で断ち切って築造している。この溝は、丘陵の稜線に直交する形に、長さ約5.5m、上端幅2.2～3.1m、下端幅0.7～1.0mの弧状に掘り込んだものである。古墳築造以前のこの箇所では、地表は23～35°の傾斜面をなしていたものと推定しうるので、築造あ

っては丘陵を深さ0.5mばかり掘削したことになる。ただし、溝底面の最高所と墳頂部の最高所との比高差は、わずかに0.1mを測るに過ぎない。溝の埋土は、東・中央部の黄褐色粘質土と西部の黒色粘質土からなる。前者は、古墳築造後比較的早い時期の崩落土、後者はそれに遅れて流入した有機物を含む堆積土であろう。

墳丘の平面形は、丘陵斜面に築造した古墳の常として、整った円形をなしていない。測量図から墳丘の規模を算出すれば、東西径4.3m、高さ1.85mになる。上述のように、墳丘は南・北兩端部の基底線が不詳であるが、判明する東・西兩部分の基底線を延伸して想定復原すれば、南北に長い楕円形になる。参考までに、こうした復原による南北径は5.5m前後になろう。墳丘の基底面は、東・西兩端で最も著しい高低差があり、東端が標高



第13図 明神山12号墳墓墳実測図（縮尺1/25）

36.55mに位置するのに対して、西端は標高34.80m余に位置しており、その差は1.75mに達する。墳丘はそのほとんどが丘陵の削り出しからなっており、盛土は東部の最高所に厚さ0.3mばかり遺存するに過ぎない。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳頂部に位置する平面形が長方形の土壙である。土壙の規模は、底面での長さ1.74m、幅0.73m、深さ0.16mを測る。土壙は、長軸が丘陵の稜線と斜交する形に南北に配置している。長軸の方位は $N1^{\circ}30'W$ を測る。ちなみに、土壙底面は地表面下0.5～0.6mに位置する。東・南両側壁は二段に掘り込んでいる。東長側壁には3個、西長側壁には1個、南短側壁には14個、のそれぞれ長さが3～11cmの角礫が存在する。土壙は丘陵を穿って造ったもので、底面は南部が北部より3、4cm高い。

副葬品は存在しない。

墓壙の形状からすると、本古墳の被葬者は南枕（ $N178^{\circ}30'E$ ）で埋葬されたことになる。

明神山13号墳（図版第八・九、第14・15図）

墳丘

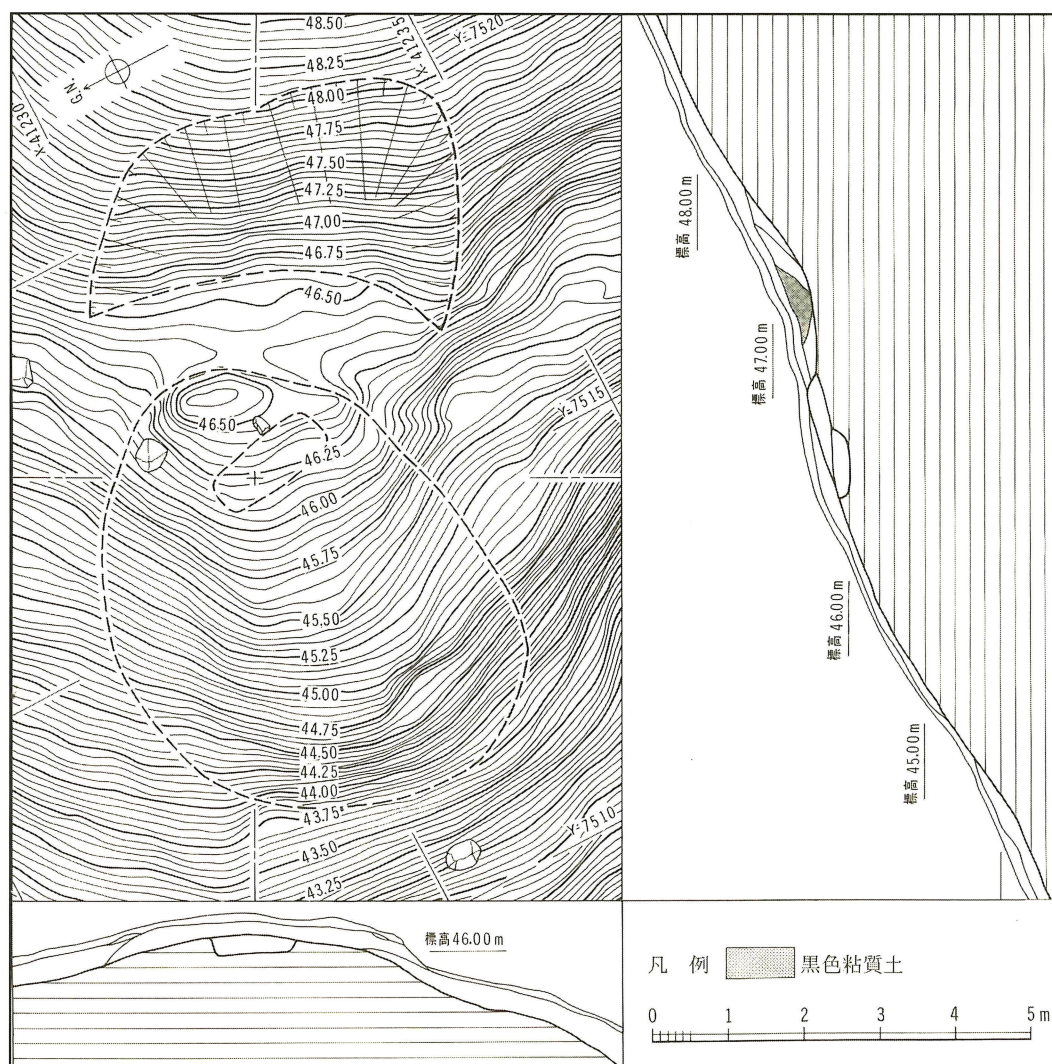
明神山12号墳の東方に約13.5m離れており、丘陵の稜線のより高所に所在する円墳である。発掘に着手する以前の本古墳は、やはり地表観察では墳丘のより高所に溝を確認しえず、いわば階段状の地形を呈していた。地表面での規模は、東西径6.6m、南北径5.5m、高さ2.85mを測る。外形は比較的良好に遺存していたが、それでも南部からより南方にかけては植林のための段切りが存在していた（第14図）。

発掘による表土・流土除去後の形状は明確で、基底線は全周を検出した。

本古墳も、丘陵のより高所を溝で断ち切って築造している。この溝は、丘陵の稜線に直交する形に、長さ約5.0m、上端幅3.2～4.3m、下端幅1.15～1.55mの弧状に掘り込んだものである。古墳築造以前のこの箇所では、地表は約 20° の傾斜面をなしていたものと推定しうるので、築造あたりは丘陵を深さ0.6mばかり掘削したことになる。ただし、溝底面の最高所と墳頂部の最高所との比高差は、わずかに0.2mを測るに過ぎない。溝の埋土は、東・中央部の黄褐色粘質土と中央部の黒色粘質土からなる。前者は、古墳築造後比較的早い時期の崩落土、後者はそれに遅れて流入した有機物を含む堆積土であろう。

墳丘の平面形は、やはり丘陵斜面に築造した古墳の常として整った円形をなさず、東西に長い偏円形を呈している。測量図から墳丘の規模を算出すれば、東西径6.45m、南北径4.85m、高さ2.85mになる。墳丘の北部では、基底線が円弧を描いているのに比べて、同南部ではより直線的になっている。あるいは、後世の段切りによる影響も及んでいるのかも知れない。墳丘の基底面は、東・西両端で最も著しい高低差があり、東端が標高46.45mに位置するのに対して、西端は標高43.75mに位置しており、その差は2.7mに達する。墳丘は、そのほとんどが丘陵の削り出しからなっており、盛土は東部の最高所に厚さ0.3mばかり遺存するに過ぎない。墳丘の内外には、丘陵に包含されている岩石がいくつか露頭している。

埋葬施設

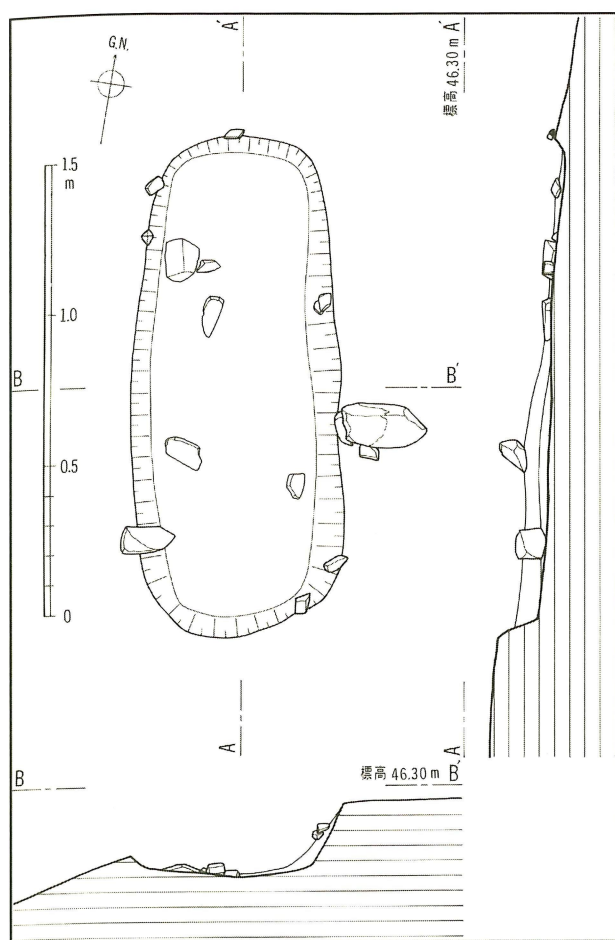


第14図 明神山13号墳墳丘測量図（縮尺1/100）

本古墳の埋葬施設は、墳頂部に位置する平面形が隅丸長方形の土壇である。ただし、墳頂部は墳丘の東部に著しく片寄っているので、土壇も墳丘の中央部から大きく東方に外れている。土壇の規模は、底面での長さ1.53m、幅0.47～0.53m、深さ0.24mを測る。土壇は、長軸が丘陵の稜線と斜交する形に南北に配置している。長軸の方位は $N9^{\circ}30'W$ を測る。ちなみに、土壇底面は地表面下0.5～0.6mに位置する。東・西両側壁、北短側壁沿いに合計16個の、それぞれ長さが5～29cmの角礫が存在する。土壇は丘陵を穿って造ったもので、底面は南部が北部より7cm幅広く、かつ9cm高い。

副葬品は存在しない。

墓壇の形状からすると、本古墳の被葬者は南枕（ $N170^{\circ}30'E$ ）で埋葬されたことになる。



第15図 明神山13号墳墓墳実測図（縮尺1/25）

ただし、現状では溝底面の最高所と墳頂部の最高所との比高差は、わずかに0.1mを測るに過ぎない。溝の埋土は、東・西両端部、中央下部の黄褐色粘質土と中央上部の黒色粘質土からなる。前者は、古墳築造後比較的早い時期の崩落土、後者はそれに遅れて流入した有機物を含む堆積土であろう。埋土中から土師器片1個が出土している。

墳丘の平面形は、やはり丘陵斜面に築造した古墳の常として整った円形をなさず、東西に長い偏円形を呈している。測量図から墳丘の規模を算出すれば、東西径9.0m、南北径10.35m、高さ3.25mになる。墳丘の南・北两部分の基底線は抜根による掘削で円弧が乱れている。

墳丘の基底面は東・西両端で最も著しい高低差があり、東端が標高51.60mに位置するのに対して、西端は標高48.40mに位置しており、その差は実に3.2mに達する。墳丘はそのほとんどが丘陵の削り出しからなっており、盛土の存在は確認しえない。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳頂部に位置する平面形が長方形の土壇である。ただし、墳頂部は墳丘

明神山14号墳（図版第一〇・一一、第16・17図）

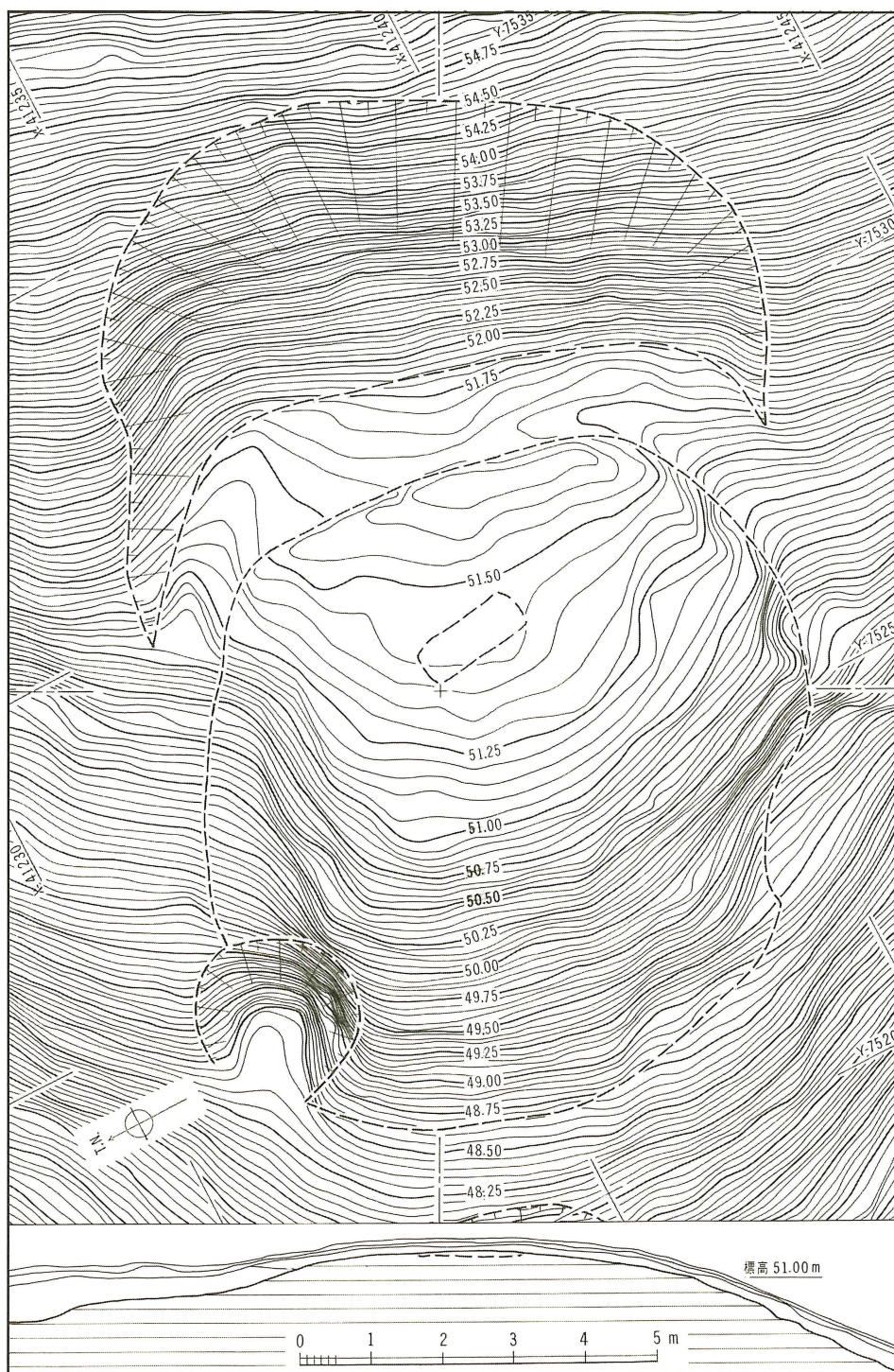
墳丘

明神山13号墳に東接し、丘陵稜線上においては最高所に所在する円墳である。

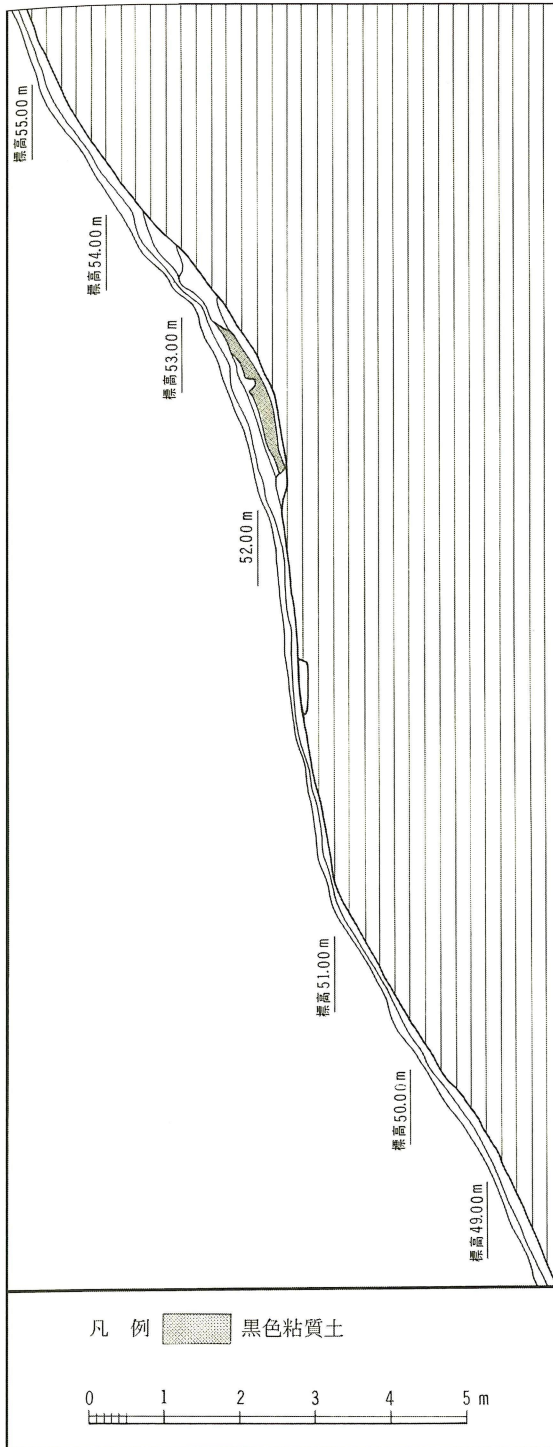
発掘に着手する以前の本古墳は、墳丘のより高所に溝を巡らし、丑寅山支群内でも最も古墳らしい形状を呈していた。地表面での規模は、東西径8.6m、高さ3.1mを測る。墳丘には、2箇所の立ち木の抜根跡かと思えるくぼみが存在していた。

発掘による表土・流土除去後の形状は明確で、基底線は全周を検出した。

本古墳も、丘陵のより高所を溝で断ち切って築造している。この溝は、丘陵の稜線に直交する形に、長さ約9.4m、上端幅4.8～5.8m、下端幅0.95～1.75mの弧状に掘り込んだものである。古墳築造以前のこの箇所では、地表は20°前後の傾斜面をなしていたものと推定しうるので、築造にあたっては丘陵を深さ1.4mばかり掘削したことになる。



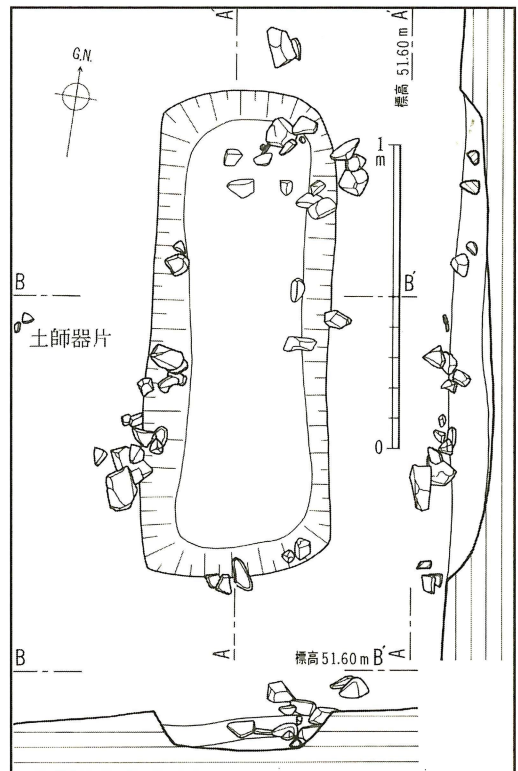
第16図 明神山14号墳墳丘測量図 (縮尺1/100)



第17図 明神山14号墳墳丘断面実測図（縮尺1/100）

の東部に片寄っているので、土壙も墳丘の中央部から東方に外れている。土壙の規模は、底面での長さ1.41m、幅0.36～0.45m、深さ0.14mを測る。土壙は、長軸が丘陵の稜線と斜交する形に南北に配置している。長軸の方位は $N8^{\circ}30'W$ を測る。ちなみに、土壙底面は地表面下0.3mに位置する。各壁の縁辺で合計40個の、それぞれ長さが2～16cmの角礫が存在する。土壙は丘陵を穿って造ったもので、底面は南部が北部より約4cm幅広く、かつ3cm低い。

副葬品は存在しない。ただ、本古墳に伴うものか否か定かではないが、西長側壁中央部の西方40cm余で、土師器片2個が出土している。墓壙の形状からすると、本古墳の被葬者は南枕（ $N171^{\circ}30'E$ ）で埋葬されたことに



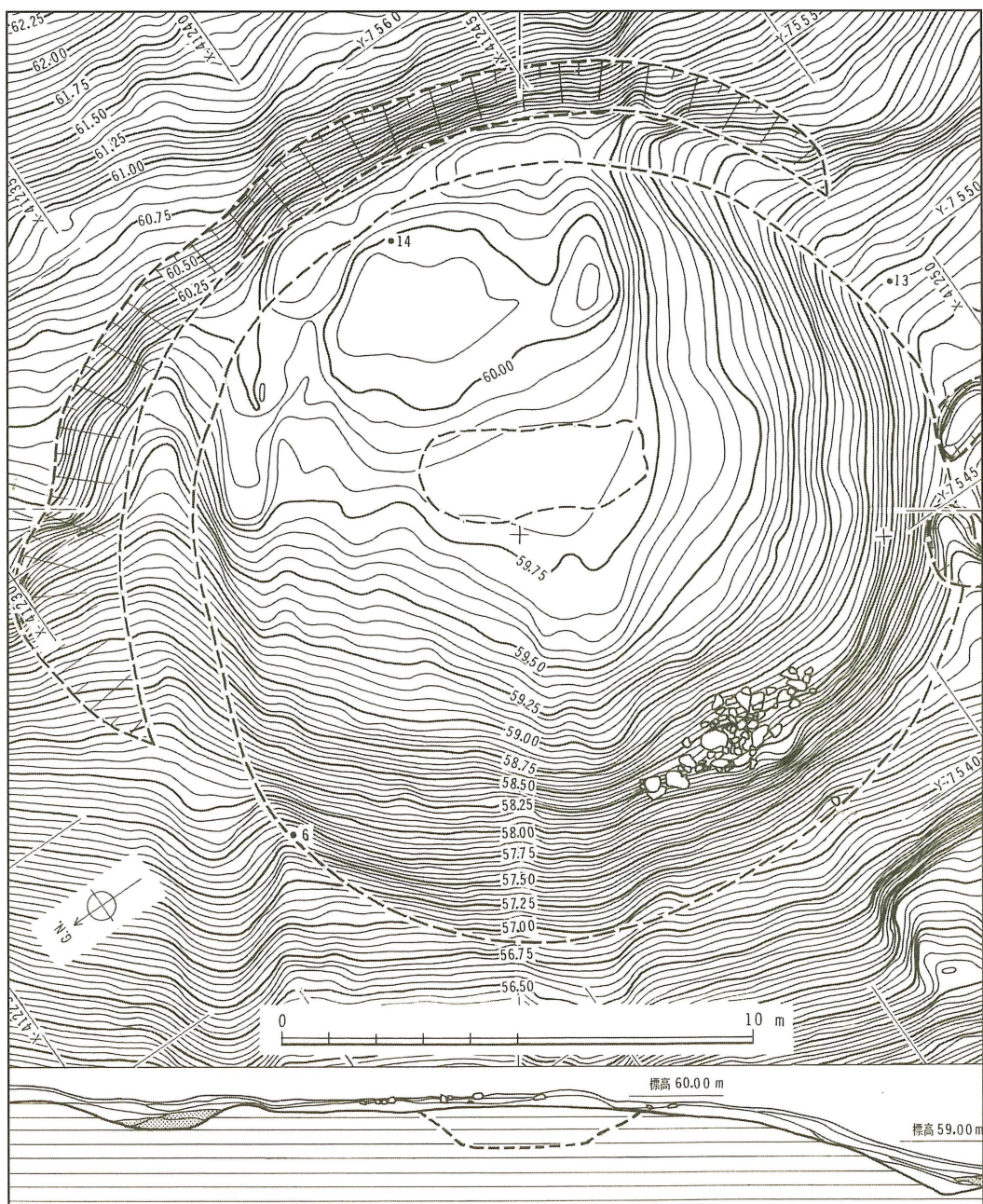
第18図 明神山14号墳墓壙実測図（縮尺1/25）

なる。

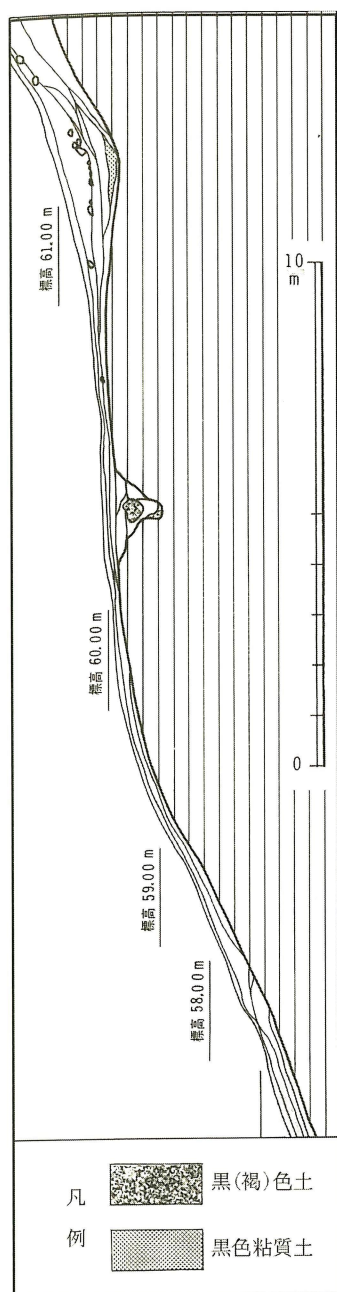
明神山15号墳（図版第一二・一三、第19・20図）

墳丘

明神山古墳群丑寅山支群の東端部、丘陵先端頂部に所在する円墳である。周辺部は中世におけ



第19図 明神山15号墳墳丘測量図（縮尺1/150）



第20図 明神山15号墳墳丘断面実測図 (縮尺1/150)

る墓地造成のために平坦にならされており、発掘に着手する以前の地表観察では、本古墳の存在は確認しえなかった。ただ、この古墳に北接する箇所を含めて多少凹凸をもつ2、3段の平坦面の存在のみが判明していた(第20図)。

発掘による表土・流土除去後の形状は明確で、基底線は全周を検出しえた。

本古墳は、丘陵の派生支脈頂部の緩やかな傾斜をもつ箇所に、そのより高所を溝で断ち切って築造している。この溝は、長さ約20m、上端幅2.5～5.0m、下端幅0.9～1.7mの弧状に掘り込んだものである。古墳築造以前のこの箇所では、地表は6、7°の緩やかな傾斜面をなしていたものと推定しうるので、築造あたっては丘陵を深さ1mばかり掘削したことになる。ただし、溝底面の最高所と墳頂部の最高所との比高差は、わずかに0.1mを測るに過ぎない。溝の外上端線が内外に多少屈曲しながら弧を描くのに対して、同下端線は墳丘基底線と平行して円弧を描いている。溝の埋土は、下部の黒色粘質土と上部の黄褐色粘質土からなる。前者は、古墳築造後流入した有機物を含む堆積土であり、後者は中世墓地造成のための埋め立て土であろう。

墳丘の平面形は、支群内でも最も整った円形を呈する。測量図から墳丘の規模を算出すれば、東西径16.65m、南北径16.40m、高さ3.25mになる。墳丘の基底面は、溝が北方から東方にかけて古墳を北～東接して巡ることから明らかなように、北東端と南西端との間で最も著しい高低差があり、北東端が標高60.00mに位置するのに対して、南西端は標高56.85mに位置しており、その差は3.15mに達する。墳丘はそのほとんどが丘陵の削り出しからなっており、埋土はともかく、盛土の存在は確認しえない。墳丘の西部斜面には、局部的な存在に過ぎないが、径0.1～0.6mの角礫67個を用いた葺石を配置している。

なお、墳頂部で土師器壺(第34図1・2)、須恵器坏(同図5)・壺(第34図14)などが、基底部北縁で須恵器高坏(第34図6)が、基底部南縁に南接して須恵器甕(第34図13)が、それぞれ覆土中から出土している。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳頂部に位置する平面形が不整形な隅丸長方形の土壙である。明神山12～14号墳とは異なり、丘陵上の緩斜面に立地する古墳にふさわしく、埋葬施設は若干東部に寄ってはいるものの、墳丘のほぼ中央部に位置する。土壙の規模は、上端の長さ4.75m、幅1.71～2.04

m、深さ0.9mを、下端の長さ2.9m、幅0.2~0.3mを測る。土壙は、長軸が丘陵全体の等高線と平行する形に南北に配置している。長軸の方位はN25° 30' Eを測る。ちなみに、土壙底面は地表面下1.2mに位置する。

注目すべきことに、この土壙は明神山12~14号墳と同じ地山を穿って造ったものではあるが、それらのように断面が矩形をなすのではなく、上・下二段からなる逆台形を呈する。土壙上部は上端から深さ0.4~0.5mの上辺が大きく開く形の逆台形に掘り込み、同下部はその壙底からさらに深さ0.4m前後の、上辺がより幅狭い形の逆台形に掘り込んでいる。土壙下部についてのみより詳しく説明すれば、その規模は上端幅0.4~0.5m、下端幅0.25~0.3mである。ただ、土壙底部の平面形は直線的に延びる隅丸長方形ではなく、多少左右に屈曲している。つまり、一般的には、木棺は土壙底部に安置するのであるが、本古墳の埋葬に木棺を用いているならば、この土壙の下部の形状はその配置にはあまりふさわしくないと考えざるをえない。なお、土壙底面は北部が南部より約5cmばかり高い。

土壙の埋土には、土壙底と上部の土壙底に相当する箇所の上下2箇所に黒色粘質土が存在する。特に、上部の土壙底に相当する黒色粘質土の下端の横断面形は、幅45cmの半円形をなしており、あたかも割竹形木棺の腐朽を思わせるかのようで、きわめて示唆的である。土壙の形状や埋土からみて、木棺は下部の土壙底ではなく、同上部の土壙底に安置された可能性が強い。そうであれば、土壙下部は排水（湿）用の措置かとみなしうる。

土壙内からは土器片若干が出土したのみで、副葬品は存在しない。

墓壙の形状からすると、本古墳の被葬者は北枕で埋葬されたことになる。

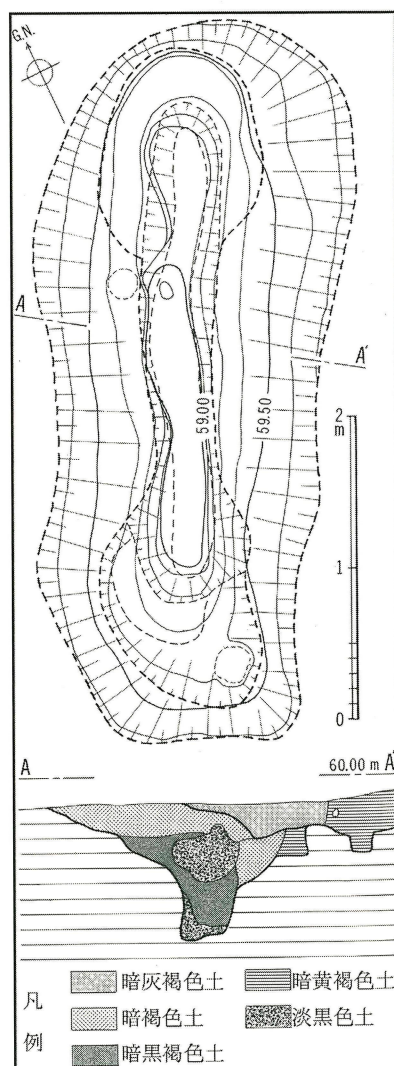
なお、明神山15号墳から西方に2mばかり離れて、東西約3.5m、南北約6.5mの長方形の遺構が存在する。埋土中より炭・土師器細片が出土している。

明神山16号墳（図版第一二・一三、第22・23図）

墳丘

明神山丑寅山支群の西端部で、丘陵の稜線上に並ぶ12~14号墳などとは異なり、明神山12号墳に南接する形に丘陵の南斜面に所在する古墳である。

発掘に着手する以前の本古墳は、地表観察では古墳状の隆起はなんら確認しえず、土取りある



第21図 明神山15号墳墓壙実測図
(縮尺1/50)



第22図 明神山16号墳横穴式石室礫床
実測図（縮尺1/50）

が南北で南方に開口する。墓壙の規模は、南北の検出長5.24m、東西幅2.5m前後、深さ約0.65mを測る。この墓壙は、丘陵を穿って造ったものである。北壁から南方約2.6mまでの墓壙内には、長さ0.04～0.29mの角礫190余個が、壙底より0.1～0.2m上位に浮いた状態で検出された。これらは、石室内の礫床の一部が遺存したものとみて大過ないものである。ただ、墓壙上縁と同様に北方から南方にかけてしだいに低くなっており、また、その散乱状況からみても、石室構築時の旧状を保つものとはいえない。

墓壙の北壁、東・西両壁北部の壁下には、石室の基底石を据えるための径0.45～0.90mの穴がならんでいる。北壁下では横長の1穴、東壁下では楕円形の4穴、西壁下ではやはり楕円形の3、4穴を数える。各穴には、基底石を配置した際、その背面あるいは側面などに充填していたものかと思える角礫1～3個が遺存している。墓壙の床面は、北壁から南方に1.9～3.6mの間が北部床面より一段と深くなっているが、これは乱掘によるものである可能性が強い。なお、開口部の西縁が広がり、排水溝の存在も確認しえないなど、不明な点も多い。

基底石配置の穴から横穴式として石室を推定・復原すると、玄室の長さは2.3～2.5m、幅1.3m前後になろう。ちなみに、石室の開口方位は、N158°W前後を測る。なお、本石室は、墓壙の形状からみて単なる横穴式石室ではなく、竪穴系横口式石室である可能性が存在する。

副葬品としては、10個ばかりの細片に破碎された状態であるが、礫や墓壙内埋土に混在して須恵器片（第34図8・9・15。なお第22図では、主要な断片のみに1～7の番号を付した）が出土している。ただし、礫床をも含めて後世の破壊・撓乱が激しく、副葬時の旧状をなんら保っていない。

明神山17号墳（図版第一六・一七、第24・25図）

墳丘

明神山丑寅山支群の東端部、明神山15号墳に南接する形で丘陵頂部に所在する小型円墳である。

いは石材採取のためか掘削され、傾斜面をなしていた。

発掘による表土・流土除去後でも墳丘は全く確認しえず、明神山12号墳の埋葬施設から南方に約3.5m離れた箇所で、墓壙を検出したにとどまる。つまり、墳丘は完全に流失していた。ちなみに、本古墳が明神山12号墳にまさに南接する形に築かれていたとすれば、墳丘の復原径は7m前後になろう。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、南方に開口する石室である。ただし、石室はほとんど破壊されており、墓壙と石室構築材の断片と礫床、ならびに副葬品の一部である須恵器片を検出したのみである。墓壙は、平面形が不整形の隅丸長方形を呈し、長軸

明神山15号墳と同様に、中世における墓地造成のために平坦にならされており、発掘に着手する以前の地表観察では、本古墳の存在はなんら確認しえなかった。

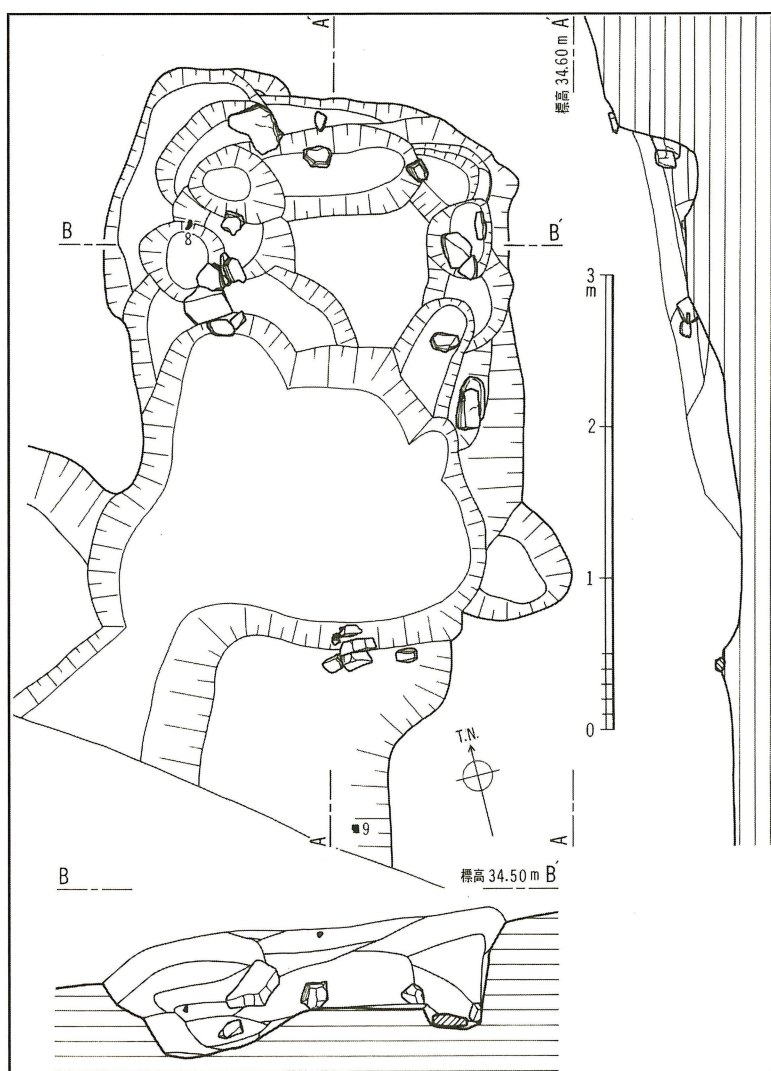
発掘による表土・流土除去後の形状は明確で、基底線は全周を検出しえた。

本古墳は、丘陵の派生支脈頂部の緩やかな傾斜をもつ箇所に、周りに周溝を巡らすことで築造している。周溝は、上端幅0.4~1.1m、深さ0.1~0.3mに地山を掘り込んだものである。本古墳に特徴的なことは、墳丘の周りに周溝を巡らすことであるが、墳丘北部の明神山15号墳に接する箇所では、その周溝が途切れて陸橋部をなしており、全周しない点も興味深い。陸橋部の基底幅は約1.5mを測る。周溝の北端部は、明神山15号墳の墳丘に喰い込む形をなしている。この事実は、本古墳が明神山15号墳に後出する可能性を示唆している。

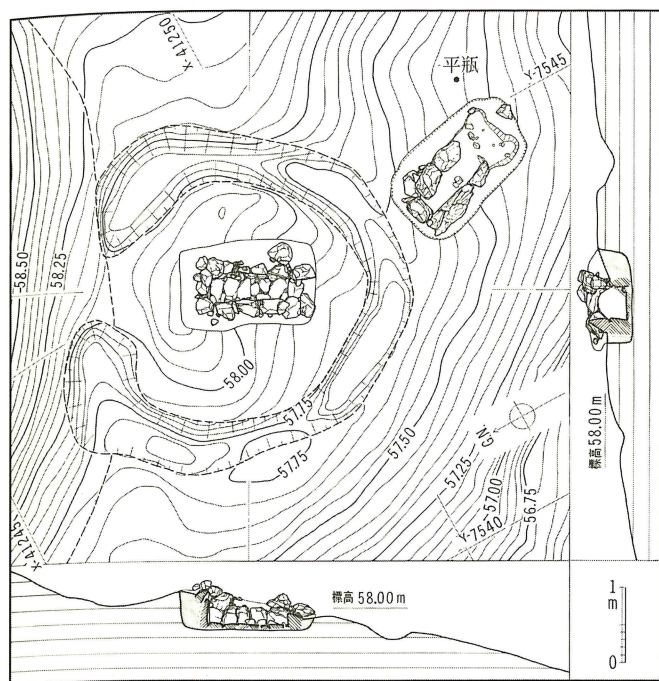
墳丘の平面形を仔細にみると、円形というよりむしろ七、八角形状の多角形をなしており、陸橋部を含めた全体の形はいわばスパード形に近似しているとも表現しうる。測量図から本古墳の規模を算出すれば、東西径約3.8m、高さ約0.65mになる。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は、墳丘の中央部に位置する竪穴式小石室である。この石室は、丘陵に墓壙を穿ち、その内部に構築したものである。



第23図 明神山16号墳横穴式石室墓壙実測図（縮尺1/50）



第24図 明神山17号墳墳丘・竪穴式小石室等
測量図（縮尺1/100）

まず、墓壙から説明すると、その平面形が隅丸長方形を呈し、長軸が南北を指す。平面形の隅丸長方形は、必ずしも整った形ではなく、一方の長辺である東辺は中央部が外方へ張り出しており、いわゆる胴張り形をなす。また、もう一方の長辺である西辺は、あたかも東辺に平行する形で中央部がやや窪んでいる。

墓壙の規模は、南北長約2.0m、東西の最大幅約1.25mを測る。墓壙の深さは、石室の所在する箇所の地表が北方から南方へと傾斜しているため、南・北两部分で大きく異なっており、北部の深さ約0.95m、南部の深さ0.18mを測る。墓壙底面はほぼ水平である。

石室の規模は、内法長1.16m、同北壁幅0.51m、同南壁幅0.36mを測る。つまり、小口をなす南・北両壁では、北壁を南壁より0.15mばかり幅広に造っている。もっとも、この石室の床面の平面形も整った長台形をなしているのではなく、東壁の中央部がいわゆる胴張り形に外方に張り出しているのであるが、その反対側の西壁の中央部は、それに平行する形で内方に張り出している。その点では、墓壙と共通した傾向を示している。石室の長軸方位は、N35° Eを測る。

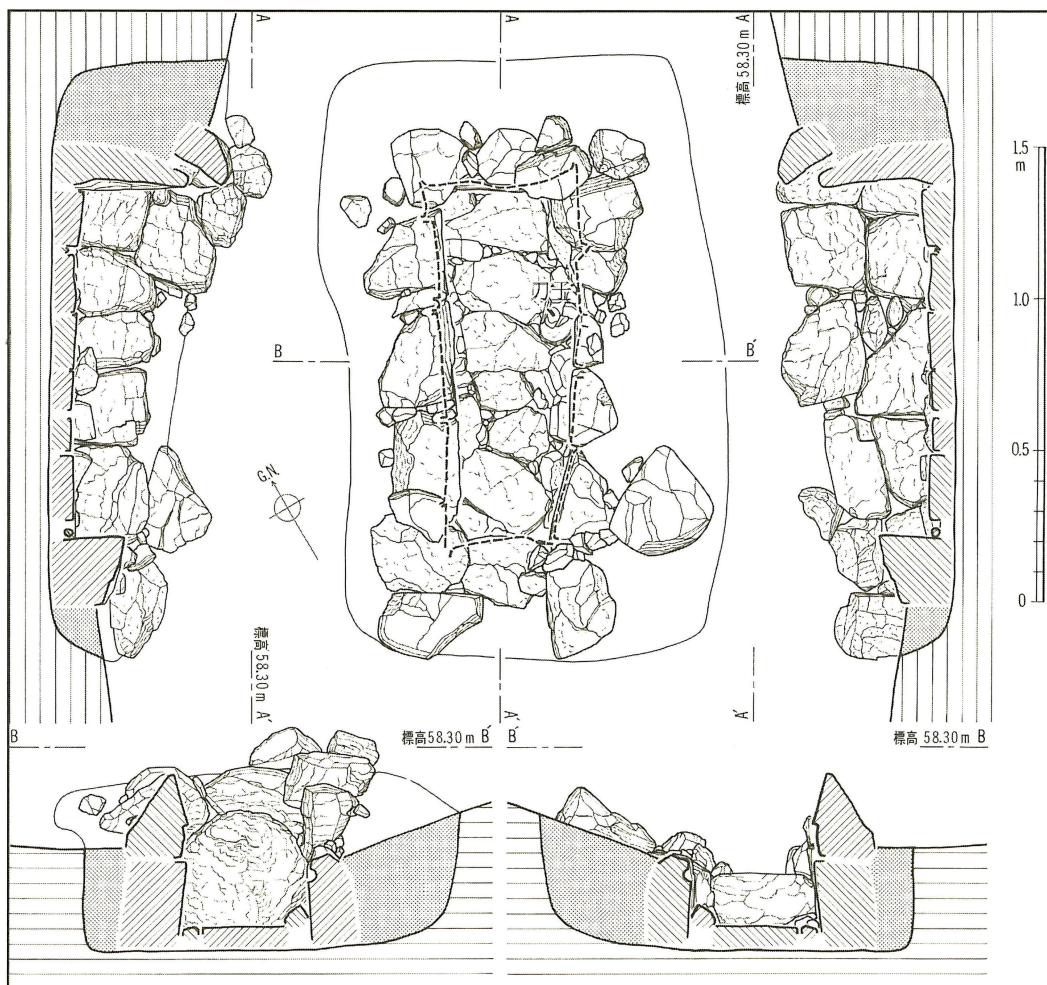
この石室には、天井石は存在しない。北壁は、厚みを持つ幅50cmの板石1枚を立てて基底石としている。その上部には、長さ43cmの塊石を、後部が下がる形で斜めに傾けて乗せている。東壁は、幅18～33cmの塊石5個を、各石の最も広い面が石室の内壁面となるような形で並べて、基底石としている。そのうち中央部の3個は、石を縦に用いている。また、南・北両端部の上段にのみ1個ずつ同様な大きさの石が残り、二段積み状況を留めている。一方、西壁も同様な大きさの石で二段積みしている。下段をなす基底石は5個、上段の石は6個を数え、いずれも横に使用している。各石の空隙部は、長さ7～18cm、3～7cmの2種のより小型の石を充填し、石室内への土砂の流入を防いでいる。南壁は、基底石をなす幅35cmの塊石1個が遺存するのみである。つまり、東壁中央部と南壁は上段の石を欠失したものであることがわかる。床面からの高さは、北壁で65cm、東壁で54cm、西壁で50cm、南壁で16cm、をそれぞれ測る。床面の標高は、北部が南部より3cm高い。床面には長さ21～36cmの平らな石6枚を敷き詰め、それらの石と四周の壁との間を長さ13～22cmのより小型の角礫で埋め、それでも残存した空隙部に長さ3～10cmの丸みをもつ小礫を充填している。

副葬品としては、東壁中央部寄りの箇所で刀子1口（第33図）が出土している。石室の形態からみて、被葬者は北枕で埋葬されたものである。すなわち、刀子は遺体に向かって右側（遺体の左体側部）に納められたことになる。また、周溝南部から須恵器（第34図13）が出土している。

土墳墓（図版第18・19、第26図）

明神山丑寅山支群の中央南部、明神山14号墳から南方に約6.4m離れた丘陵斜面に所在する土墳墓である。

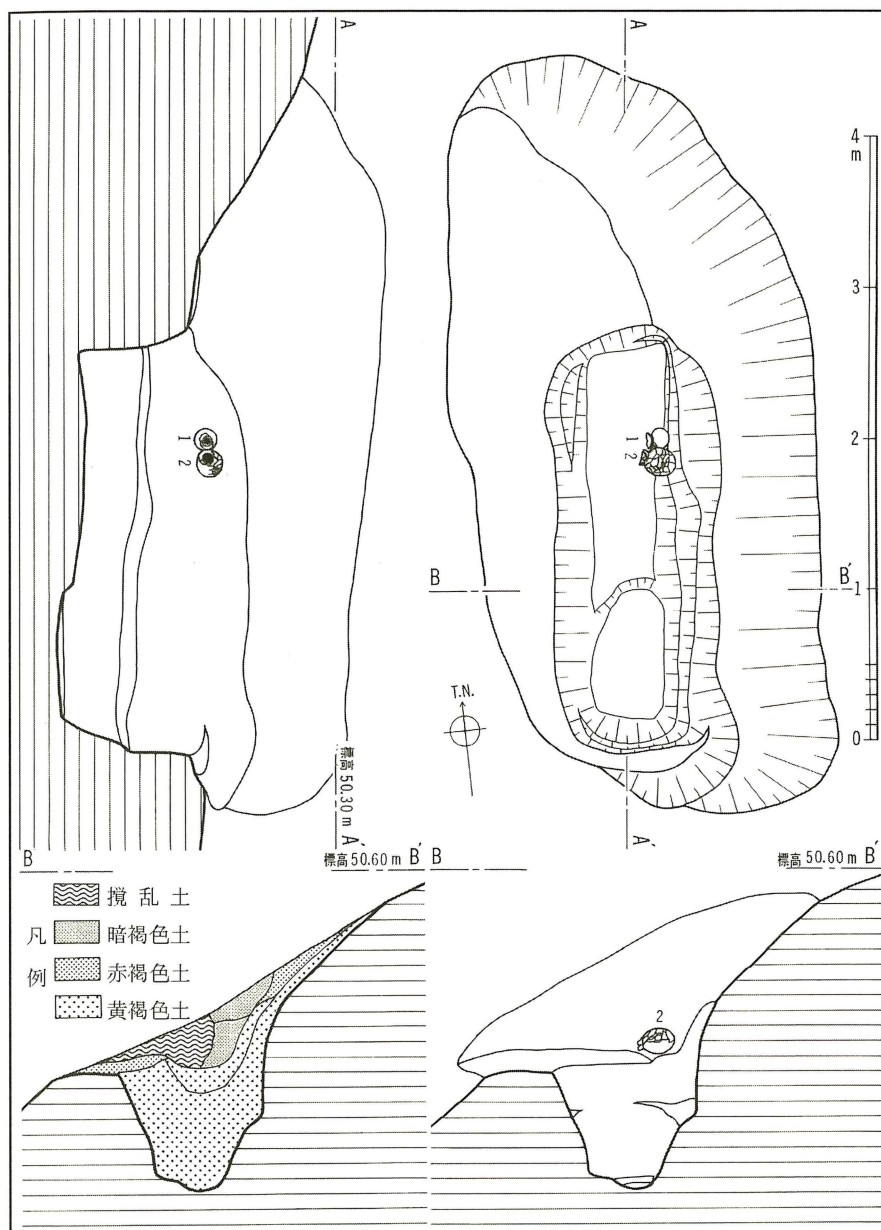
この土墳墓は、丘陵の傾斜面の南北径5.18m、東西径2.45mの不整楕円形をなす範囲を掘り込ん



第25図 明神山17号墳竪穴式小石室実測図（縮尺1/25）

で、南北径4.56m、東西径1.43mの平坦面を設け、さらにその東縁に接して土壙を掘り込んで造ったものである。土壙の平面形は、隅丸長方形を呈する。土壙の規模は、上端の長さ2.83m、幅約0.95m、深さ0.66~0.98mを、下端の長さ2.48m、幅約0.38~0.51mを測る。土壙墓は、長軸が等高線と平行する形に南北に配置している。長軸方位は、N6° Eを測る。

この土壙墓で特徴的なことは、墓壙が上・下二段からなる点と、さらに墓壙底の南部が一段と



第26図 明神山17号古墳群土壙墓実測図（縮尺1/50）

深くなっている点であろう。北壁・西壁の一部を除いた壁には、上端から0.25～0.50mの深さに狭い段が巡っている。

土壇底面は、北部が中央部より14cm余り幅広く、かつ9cm高い。一方、土壇底面の南部は、長さ約1mにわたって、北・中央部の部分より0.1mばかり深く掘り下げている。その位置や形状からみて、排湿用の機能を持たせるための措置であろうか。

副葬品は存在しないが、土壇の東壁北部の上縁において、土師器壺2個（第26図1・2、第34図3・4）が西方に横転した状態で検出された。これらはともに完形品なので、墓上に配置された供献土器であろう。

土壇の形状からみて、被葬者は北枕で埋葬された可能性が強い。そうであれば、供献土器は、被葬者の頭・胸部に相当する上位に配置されたことになろう。

竪穴式小石室（図版第二〇、第27図）

明神山丑寅山支群の東端部、明神山17号墳の周溝に南接する形で所在する竪穴式小石室である。発掘の結果や石室の所在する箇所から勘案すれば、若干の盛り土の存在自体は否定しがたいけれども、さほど顕著な墳丘を構築しなかったのではないかと考えざるをえない。本石室は、丘陵に墓壇を穿ち、その内部に構築したものである。

まず、墓壇から説明すると、その平面形が隅丸長方形を呈し、長軸が南北を指す。平面形の隅丸長方形は、必ずしも整った形ではなく、墓壇南部は北部より狭く、また南辺中央部が外方へ張り出している。墓壇の規模は、南北長2.0m、東西の最大幅1.21mを測る。墓壇の深さは、石室の所在する箇所の地表が北方から南方へと傾斜しているため南・北两部分で大きく異なっており、北部の深さ約0.40m、南部の深さ0.18mを測る。墓壇底面は北部が南部より6cm高い。石室の長軸方位は、N17°Wを測る。

この石室も、明神山17号墳の石室と同様に天井石は存在しない。側壁の南部も欠失している。石室は長軸が等高線と平行する形に南北に配置している。現存の内法長0.96m、同北壁幅0.42mを測る。仮に内法全長を復原すれば、1.3m前後になろう。北壁は、厚みを持つ幅40cmの板石1枚を立てて基底石とし、東・西両壁との間に生じた空隙部を長さ18・26cmの小型の石で補っている。板石の上部には、長さ35cmの細長い石を横積みしている。東壁は、その過半を欠失しているが、北部のみ遺存する。東壁北部は、長さ40cmの塊石の最も広い面が石室の内壁面となるような形で横にならべて基底石としている。さらに、その上段には、ほぼ同様な大きさの塊石を横積みして二段とし、各石の空隙部を長さ7～14cmのより小型の石で補っている。東壁南部では基底石を欠失しているが、それらを据えるための3穴が存在するので、東壁の基底石は都合4石からなっていたことが明確である。一方、西壁も南部を欠失しているが、やはり同様な二段積みである。下段をなす基底石は2個、上段の石は1個が遺存する。西壁南部では、基底石を据えるための1穴が存在するので、西壁の基底石は都合3石からなっていたことが明確である。南壁は、全く遺存しない。床面からの高さは、北壁で48cm、東壁で60cm、西壁で49cm、をそれぞれ測る。床面は、北部が南部より8cm高い。この石室は、明神山17号墳の石室と類似しているが、明神山17号墳の石室より用材がやや大きく、また、床面の板石敷きは存在しない点が異なっている。

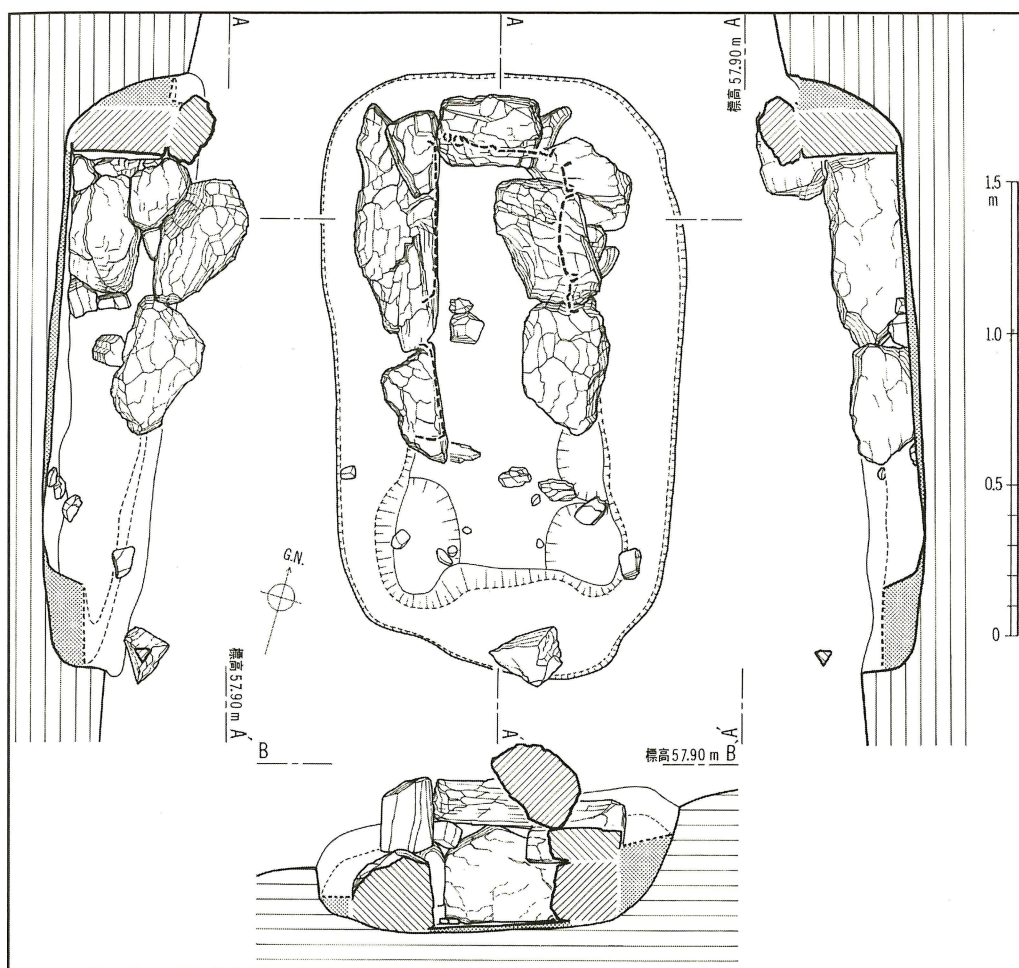
副葬品は、なんら検出しえなかったが、石室の南端部の東方50cmばかり離れた箇所、須恵器平瓶1個（第34図11）が出土している。

石室の形態からみて、被葬者は北枕で埋葬されたものであろう。

参考までに、明神山14号墳の南方約10mに位置しており、調査前には明神山16号墳と仮称していた平坦地は、発掘の結果古墳ではないことが判明したが、ここで簡略に報告しておきたい。

この箇所は、発掘に着手する以前の地表観察では、平面形が紡錘形を呈する平坦地をなしていた。その規模は、南北長10.5m、東西長2.5mを測る。

発掘による表土・流土除去の結果、傾斜のきわめて緩やかな斜面の存在を確認したに止まり、なんら明確な遺構は検出しえなかった。ただし、この箇所は、周辺の地形と比べると同様な自然地形とみなすにはあまりに不自然な感が残る。発掘地区の南端で、銅銭2枚（「治平元宝」1枚、



第27図 明神山古墳群縦穴式小石室実測図（縮尺1/25）